逸史譯本

五

和書門
二八四一〇 號 類
一八三 函
一〇 架
一二 冊

内閣文庫
和 書
二八四一〇 號 類
一二 冊
一五〇 函
九 架

内閣文庫
番號 和 28410
冊數 12(5)
函號 150 35

国立公文書館
National Archives of Japan

竹山逸史巻之五

目録

一柴田勝家滅亡の事　天正十一年
一織田信孝自殺の事　同
一秀吉大坂の城築る事　同
一小牧長久手合戦の事　同　十二年
一織田信雄秀吉と和睦の事　同
一秀吉内大臣に拝せらる事　同　十三年
一内大臣秀吉四国征伐の事　同
一内大臣秀吉関白となる事　同

日本政府図書

国立公文書館
National Archives of Japan

一関白秀吉諸人に金を分ち賜ふ事　同
一関白秀吉北国征伐の事　同
一石川数正出奔の事　同
一聚楽亭成就の事　同十四年
一大君関白の妹を娶せらるゝ事　同
一大君御上洛の事　同
一主上御受禅の事　同
一大君駿府に居城し給ふ事　同
一関白太政大臣に拝せらるゝ事　同
一大仏造営の事　同

竹山逸史巻之五

向陽佐粲叟甫　譯

天正十一年正月織田信雄軍兵を催し勢州笹山の城に攻よせらる此の城ハ先年北畠具教没落の時具教の舎弟具親一人芸州に逃のかれて毛利氏を頼りて居たりしか今度三七信孝の方人として勢州に志のひ上り竹條山に楯籠りゐ信雄の勢に二日ほと攻られしかゝ一下さゝへもせす具親ハ城を捨て落うせ残党ハちりゝになる十六日大君岡崎の城に入たまひ信

雄まろりく御談合ありけるに依りし羽柴秀吉七万五千の
軍兵を引きゐ三方より勢州に打入り瀧川一益か籠りし
長嶋の城を攻られる 信雄も加勢の軍兵を出されて閏
正月にその端城三ヶ所まて攻おとされ 柴田勝家滝川と双方
より秀吉をはさみ打にせんとて 作間玄蕃允盛政に
二万の軍兵つけられ江州木本に向はせ在々所々に火を
かけて乱妨せり 秀吉かくと聞よりも蒲生氏郷関万徹安藝守信
盛か晩号し 山岡景隆を勢州に留めて一益にあたらせられ
江州にまかりて かくし賤か嶽にかかりけるに 越前の勢は早く
も陣を退けらり 秀吉小高き所にのほりて打なかめ

作間か陣をのそいて 用心怠られたり 急にかかる
しとて砦をかこまへ 諸将を手分して攻られ本陣をは
長濱に退けられてけり ㊌ 信州小室岩尾の両城 上杉の下
知を受て大君に降りす 依田信蕃舎弟信幸信
春手勢引具し岩尾をひしと攻にせられ兄弟三人鉄炮に
あたりて同し枕に倒れ死しけると味方引ていれは
に城をはおとしてけり 二月大君信蕃の討死を惜ませ
たまいそのこなし子康國に加恩の地をあたへ 大久保忠世に
後見させて小室の城をも攻させらる 城主芦佐美定
行越後に逃去る ○近衛前関白前久公 秀吉と不快

めるに起て大君の依許に身をよせらる大君よりきよし
てるしめ小 ㊀越 柴田勝家大軍を起しませ上りて江州柳
瀬に陣をとりく秀吉下知して賤ヶ岳の砦をまもし
堅固にしかりくせるて出合せ丹羽長秀も軍兵を従へて
秀吉の陣に加る四月美濃の舘織田信孝又乱を起し柴
田瀧川に方人し軍勢を出して雪々乱妨せ秀吉大
に怒り信孝の母の清洲に人質に奪りしをと
らへて安土城下に於て磔にかけられ軍勢を引て美
濃の大垣にむせ向ひ十八日信孝と戦て或やめ信孝に
粉と切られ郎黨幸田兄弟を生捕る作る人佐間玄蕃

に向ひ今秀吉美濃に攻入りて三七殿難儀に迫りこのまゝ
いそぎ来らひ勢をたゆみやといふ盛政こゝに之へてこれも志らおし
そこらまにかくる彼と大歎まへに有て砦をかまへその上湖水
賤ヶ岳の庭を取りて何つて勿やまくかしこに越行庭を取
と云その人玄蕃に耳に口よせて歎の砦ゝ乱堅固なり
併なから後軍にそなへる中川清秀賤ヶ岳の麓に砦を
まへ前軍をたのむして堀石垣も出来そろはぬ今もし小谷合
廻りて余吾の湖にうち出られ不意を襲ひるすが一戦に
攻落せへし秀吉も美濃に居らるゝなかるゝハ意見まちふ
るを叶まし麓の砦さへ攻おとしなそその外ハ戦もも

及れ破られん孫子か兵ハ奇を以て勝とや申しも此度の
るすなるめとまてめしうえ玄蕃その議に同し本陣に帰
てかくと申す勝家大に悦ひ掴ひて抵見る軍兵をかけて
諸方の砦に付ふせん汝ハ其のまゝに打立居し寄し
なるより一戦に勝をえらえ直拒打ちし ゆめし敵地に
野陣なとを打居られて日をはけまてて定りぬかくて
作間玄蕃盛政ハ水海の寺ともにふくらひ一万五千の軍
勢をひきぬきて廿日の未の刻に岳の麓に至り中川
清秀か下部ともの馬を水飼ふとて不意に出て人馬共に
おそひ寄る清秀大に驚き高山友祥と共しに防き戦

ひしか共終に勝負をもつけかゝりし盛政思ひ出せしハ
かの先年長篠の合戦に遠州方より鳶の巣の砦を焼
ちらして大勝せしためしあり此の時にあたりて用ゆへし
とて手下の大将に下知し敵のうしろに廻て外なる陣
屋に火を放たしめハ押寄て達せん敵陣大にさわ
き立高山友祥ハ木本の砦に逃入ぬ清秀ハ討かゝり
さゝへし士卒をはけまし再ひ砦をまもりしを盛政ハ
短兵急に攻寄しかあまた目を入かへての新手に清秀
出くみて追んとするときさらしかへせしと喜ひ挑ミ立に
を追てよき敵五六騎切て倒しその身も近落何某か

たゞ終に討れぬ諸方の砦はちからをとゞめて思ひける
きるものなれども只秀吉の軍令を守りて出て戦はんとせ
ざりし盛政首数取るとき日も暮や西山に傾きければ
勝家が本陣に勝軍の早打をして清秀が首を実検
にそなへていさみをなせる其今日の合戦に味方勝たる上は
せぬ今宵はかならず一宿して明日帰陣仕べしとすゝめ
勝家大いに悦び近道より帰らば是より二里にはあらぬ程を
いそぎ急ぐとて追て逃ぬる事やある不慮の高名してたれ
いそぎ軍勢を引上て鋭気をやしなふべきなり
勝ておごりたる者は敗軍の本之とて急ぎ帰陣有べしとの

早打櫛の歯を引がごとし盛政ちかつて勝に誇りければ
たる味方の陣へ誰か夜討を掛る者あらん男氏夜にも花
巻して臆病神やつきたるらんとあざ笑てぞ居たりける
[注：盛政ハ勝家ガ妹の子]
兎角の内に日も暮盛政帰りまでければ
勝家は何の小伜めるとも大事をあやまつなるらんと
足ずりしてぞ待居たるかゝる所に羽柴筑前守秀
吉は信孝が籠らる岐阜の城を攻んとしけるが俄に大
雨ふり来て緑川の水まさり渡りかねてありけるが
岸に陣をとらしるが此日午の刻賊が岳の早打大垣
に達せしかば秀吉清秀の敗軍を聞てかねりしと

打笑ひ大刀引抜て小踊し敵ハ袋の中に入たりとて秀吉ハ
勝軍せんもの明日の事とハおほえさりしいて手なみの
程を見せんとて屈強の侍ハ其の五十人をえらみ立汝等長
濱に先立て二十五人ハ所の者共に催促して酒ニ
まより飯馬のたてし用意させ道の左右に待せ並け代物ハ
倍にして償ふへしとや申せよ又二十五人ハ途中の百
姓に松明をともらせて山に植つらせ長濱より賊ヶ岳まて
昼の如く照さへしさもしもるいかの褒美とらせんとや申せ
よそいそき追立よとて軍中に下知して此度江州の
柳ヶ瀬にありて勝軍の事よろこれしかりし急き出立て

出陣をいそかれへし　堀尾吉晴氏家行廣二ヶ備へにあるに
前り岐阜の勢を防く為しとて中の刻をかかりにたちて
惣大将と成て鐙をならし鞭振上け歩武者騎馬武
者一万五千暴風の如くかけ出て目もくらむなんとしける
長濱より賊ヶ岳まて松明天をこかし兵粮途中に
出向ひけれは味方の勇気百倍し戌の時にも早や賊ヶ岳に
着せたまき諸方の砦に使者を立本陣をもて到着しぬ
明暁未明弓鉄炮をそろへて各敵陣に打掛らはしとて下
知をたまふ作間盛政松明の光を見て大に驚き老しう
士卒ハこなた草臥て高鼾に臥しおこせとも起んとせん

盛政比ゟ廻して急に陣を立直しける時廿日亥中の月の
出るや山の端に立のほりけり諸方の諸勢を新に盛政の陣
の動くを見弓鉄炮をそろへきそひかゝりしかは盛政戦ふて
引取し岳の北まて引しに屈強の切所なれはとゝまりて
ありしか未た明ぬ時に柴田勝政（三左エ門と云盛政の舎弟なり母方の姓をなのる）
三千の勢を引て岳の麓に陣せしを盛政使をたてゝいそ
きその所を引て加勢に来るへきよしやされ勝政ひか
んとせしを秀吉岳の南よりて追せまり鉄炮を雨あら
しの如くうちかけ勝政の陣しとろになる処を秀吉左右に
下知し備を乱して鎗しの高名せよとありけれは小
姓はさらいし加藤虎之助清正福嶋市松正則加藤孫六
嘉明平野権平長泰脇坂甚内安治片桐助作且元糟谷助左
ヱ門武則鎗引さけておそろしき突伏せし戦ふて清水
坂のほとりにて勝政を打取り世にこれを称して柳ヶ瀬の
七本鎗といふ（又賤ヶ岳の七本槍といふ）従ひに逃る者をは追かけ追つめ
盛政の陣に向ふ盛政大に敗北しぬ猶も追打て逃る者の
首五千余級をあけたりける此の時柴田勝家は江州椽山
に陣されたりしか夜半ころに陣中俄にさわき立けれ
はとかく秀吉の勢攻寄せると云ふほとに程なく湖水
の辺に打いてゝ矢叫ひの声鬨の声耳をとる如くなりけれ

未明に敗軍の注進ありけれハ士卒ともわれ〳〵と逃ちりて
勝家の旗本ハ僅に三千人になりしかは宗徒の諸將等を
そろへ先引かへと勧めしかと勝家聞入されハ毛受
莊助と云者何かうちにこふて勝家の馬印をかり一族家
人々をまねきて勝家をおとせしうへ秀吉の勢を一手の印を
見て皆たゝ集る所を莊助兄弟命をかきりに戦ひて命
黨のさむらひ同し枕に討死すそのひまに勝家ハおちのひける
能登国主前田又左衛門利家柴田にくみして茂山の陣
にありしか賤か岳の戦破れしかハ府中の城に引退て
勝家やかて府中に落来り利家に對面し湯漬をこふて

喰ひ疲たる馬一疋乞受しとてすゝめて出けれハ利家
道の程送り参らせんと打出る勝家かたく辞して
立寄らハ又利家をよひ返し己后ハ羽柴に年比のよし
みありけれハ勝家との誓ひをすてゝわか身の家の
たゝんを思ひはかりとはいひ捨てその日既に夕くれにおのか本城北
の庄に皈る從人わつか百人余りなりしをそろへして
ありして籠城の用意せらるかくて羽柴秀吉ハ勝家の
あと追かけて府中に至りしか只一騎かけつけ城の大木
戸に進み出て又左衛門〳〵と高声に申されけれハ利
家出迎ひて随ひに秀吉の手に属し国中の諸城を

方人に与る廿三日進んて北庄を追入れ巻き外郭に火
をかけゝり勝家か家子柴田権六并に作間玄蕃をも
山中にて生捕り秀吉に献する者ありて秀吉両人に縄を
かけて城中に見せしめけれハ勝家いかりけれ猛冠者
か為に命を志ぬハいぬとて夜にいり四方の守りをとゝめて最
後の杯とりて静に酌かはし明れハ廿四日その妻織田氏
〔信長の妹〕と天守に上り火をかけて生害し柴田か家ハ亡ひ
けり秀吉進んて加賀に打入ぬ最初緒谷の城主
浅井長政信長の妹をむかへて二人の娘をまうく信
長緒谷を攻落されし時その妻女を請とり

〔此事三巻目の初に委し〕改て柴田勝家に嫁せしめらる二人の
娘もろともに伴れし子まて伴ひけり今度北の庄落んとす
ある夜勝家妻をほとり近く招き御身ハまさし
く故信長の妹なれハ猛冠者も何しくもてなすへきまし
し此城を忍ひおちていかなる人にもまみえんと
陳れハいやとよ我身ハ緒谷にて死せんとうし
身なるにかひなく生のひて浮世に面をさら
しつるさへ恥かしくは今度再ひ貞女の道を失ひ
中さんやと打泣く時鳥の鳴けれハ
「さらぬたに打ぬるほとも夏の夜の別路そさそふ

小時鳥なるによしなり勝家その心を感し
て三人の娘ハ浅井か子なれハそれしに死せんやう
なしとてもうかし抜きしらく送り出させ一乗谷と
云所に隠したりしを秀吉内々し出して於ん
ころにいさそり後惣領を妾にして寵愛なしける
し（なる也淀殿なり）次ハ京極若狭守高次に嫁し　末女ハ木
下秀勝に嫁せしも秀勝ハ信長の子にて秀吉の養子
となるなり（秀勝死して後の御臺所となるそうなり 白徳院殿）最初勝家か攻られし
時尾張の屋形信雄卿加勢のことを　大君ニ申越さる
大君うつらう軍兵を引て近江の境にいそりぬへし勝家

家亡ひしとの注進に依て御分国なる信雄岐阜
の城を攻られしに勝家か城中に守りて籠城せる
ものの数をあつめ信孝今はせんなくして尾張
の内海におち行き瀧川一益か配下の諸城も降る
者多し　廿九日信雄人して信孝に自殺をすゝ
めさせ信孝二十六才にてむなしくなられ五
月秀吉坂本に凱陣し浅野弥兵衛長政に命し
て柴田権六作間盛政を京の六條河原に引立て
くびを刎させぬ盛政元より強勇の者にて世の人
に鬼玄蕃と呼ばれし者なるか首の出になりぬ

是なりとて勝家伯父の言葉に従ひし権冠者
をかの如く志なき首にせんよりものをといひて
せしかとも盛政眼をいからし過言狼籍なり
と叱りぬ盛政猶もおそるゝ氣色なく天下をとら
まんを生捕となりてそ武士の常なりおのれも知る
るなれハとて打せし首いきある人の如しとそ
勅命ありて秀吉を従四位下参議になさる　大君
石川数正を江州にさしつかハし勝軍のよろこひを述
させらる　六月長島城主瀧川一益城をひらけ伊勢
五郡の領地をさし出して降人に出ぬ秀吉江州に

おいて五千石の田地をあたへらるゝ事ありて平らき
しかは伊勢伊賀二国をもて信雄卿にまいらせ其
の外に恩賞の沙汰ありて信濃の国乱れて森長可
領地をうしなひけるにより改て美濃の国金山の城を
あたへ丹羽長秀一番に柴田にそむきまいらせ秀吉に
くみせしかハ本領若狭の地をいふに及はす越前加賀
の内二郡を除て賜ハる（百万石又ハ七十万石ともいふ）其後長秀越
前国北の庄の城にうつり住し又七本槍の功を
賞して清正をはしめ五千石宛加増し　信
雄を勢州長嶋の城に移して信長の嫡孫秀

信郷を江州安土の城に迎へ入れ申されし　七月　大君の
姫君氏直（北條）の北の方に定られ相摸へ御入輿ありし
酒井忠次送りまいらせらる　八月秀吉使者を濱松の
御城に遣はし音物を送る　大君甲州に御出し
有上野国沼田の城主を始とし城八ヶ所攻玉て嫡子
源次郎信幸に沼田の城を守らしむ　㊈肥前国主の
龍造寺隆信勇気ありて暴虐に宗徒の大臣殺されて
敵に内通する者多し　隆信かくの如く打ちし
治まりし道なれば薩摩の勢打入に及て彼宮の
諸城主多く殺されしかば島津に方人しければ隆信
怒て彼宮の人質を礫にし　子息民部大夫政家
を御し向け諸所を打平らげしむ　されば肥前
原の城主有馬修理大夫義純も政家が舅なれば隆
信が日ごろの乱行をにくみ親類のよしみを捨
て島津に内通しけるに依て薩州の勢まづ肥
前に攻入て義純が方人しく安徳と云所に陣を
かまへたり　隆信安徳に攻よせて打負て引返し将
津方も加勢の兵を原の城にのこし置て帰国す
㊤　十月　大君正四位下右近衛権中将に任ぜらる　㊥
毛利氏秀吉の勢大ひにおこるをきゝて吉川廣

家を上洛させ去年高松まて和議をみやうに申遣へ
し一礼を述させ扨又両家のよしみ違ふまは
ろへからんとやさしかりけり (坂)秀吉織田の地を巡覧し
京都ハ山ふところにて運送の便利あしく其上日
本諸大名の屋敷をかまゆへき場所なくて諸国乃
参勤を引受るに便ならさりし 大坂ハ近く海ありき
ある地ふてありし大河大海を引付ケ四方の便利此
地よりまさる事なかりしとて今年十一月城普請をは
し免心一ぱいの縄張し諸大名に仰せて大石大木
をはこはせ手傳を蒙り大名十ヶ国余成就せり

たりて宮殿楼閣ハ中にも及ハれ堀石垣の堅固なりける
天下にならひなかりし (四)今年長宗部元親さぬき
をも平らけ四国一国を領し威勢ありけるをえらふ
(織)秀吉威勢まさるに盛になり織田家の人をも部下
におかんとし主家に對し手を出しかゝる
信雄ハ方より事をおこさせんとたくみてまさ
と秀吉うき心をもちき信雄を害せんとする企
ありといひ觸れ
天正十二年正月織田の一家中安土に集りて年
始の御礼を申せ秀信卿の御礼式事終て次に

信雄か歳首に至りて年礼をのみ羽柴参議秀吉
大津まて来てまさに安土に入らんとす信雄大いに
怒りしかハ一家中の面々中に立てさまくにとり
なし三井寺において双方遺恨なきよし誓
紙をかはしあへと中勧めけれとも信雄その意に
満たせられす信雄の家老に岡田長門守重善津川
玄蕃允義冬浅井多宮瀧川三郎兵衛雄利とて
四人なりし才覚ある人にて兼て秀吉に交り深し
秀吉心におもひけるハ今度三井寺にての和談も
あひてこそ謀成就せん所詮四人の家老を

招きひそかに心腹をはかりし事なりしにはたして
の領地をあたへんとせられけれハ方人せぬ人ハあら
ましくもし又違背の者あらはそれを幸
に今度の和議を破る便にして四人を誘き
て談合せしかと三人ハ一議にも及はれ承引し
瀧川雄利のみしうちへいつはりの気色にして内
心に随へさりまし偽誓紙をかはされ置けるに
至て雄利その密計を信雄にうたへしかハ信
雄大におとろきて直様長嶋の本城にそれ仰られ
秀吉誅伐の軍議をせらるとて三人の家老さまへく

諫め留めしかは信雄ハ打笑ひ秀吉ハ当家の
仲間まてつとめ何れも其れとて徳川中将と申合せるさ
かれしか首をとらるゝ事を捨よりいと安しと
申されしか先より三人を病気と申立て出仕せん二月
大君従三位参議に任せらる ㊈ 龍造寺隆信 子息
政家に二万の軍勢を附て原の城をせめらる
数十はか所矢軍のしまて合戦せしところ城主
有馬義純軍勢を薩摩にのかれんとせしに島津修理
大夫義久をもて頼れしに兵三千人をさしそへて後巻
を隆信を政家か敷日か間に功を立ぬハ義純にくれら

か男たりしハ妻縁によりてそろしき合戦に
及ぬとおのれとあなた武士に似けなき奴かなとて
みつから馳むかひ戦しとて出陣用意し筑前筑
後に軍兵を催促せ ㊋ 三月織田信雄家老重善
義冬多宮の三人を呼出し首をきる 軍勢をかけ
差して三人か本城を攻亡し秀吉と絶て加勢の事
たのみこしける 大君石川数正水野忠重をさし
向らるゝあひ人織田勢の星崎 尾張の地重善か本城なり にむかひ上陣
させ加へるをても攻よせんとせる時秀吉忠
重か手とらひ思ひの侭ならて恩賞あまたあたへん

程に　大君に叛き与らせて味方せよと申送る忠重
その書簡を　大君に献して秀吉に従ハれし瀧川雄
利か手にて勢州松島の城を攻おとしぬ（義冬か本城）信雄其
功を賞して松嶌を雄利にあたふ　大君服部半蔵
正成を遣ハされし雄利をあさむけて松島の城をとらせ
給ふ　信雄使者をもて池田信輝堀秀政森長
可を味方にまねく　秀吉も又三人に味方せは大
国をあたへんとてまねきけり　信輝心に両端を
持ていたりしに味方せんとも決せさる秀政長可とハ
皆信輝の婿なりけれハ信輝か与する方に与らん

云時に信輝の子輝政長島の城中に人質となり
来り居けり　信雄の心中にハ信輝事亡父信長の
高恩を蒙りし者なれハとても当家に背くへき
様なし　そのうへに人質を入置けれハ此方より人を
さしつかハさんとて輝政をも送り返さる　信輝子の
返りたるを見て今ハこころ安しとて忽ちに秀吉に
くみしてまつ人質を取かへせぬはなし　秀吉又　大君に
使者をもて信雄をすてて方人しなさんには美
濃尾張両国のうち進退にまかせらるへきよし申しおく
くる　大君御立腹ありてまもとを辛生款しかりし

は織田内府に背れるものなし逆賊となりけるからにし
きるや逆ふとて利を見て義を忘れて家康を
うらみとやさせけるに秀吉人して滝川一益をそゝ
のかし御辺は時にあひて軍兵をかりあつめて本領
伊勢五郡長島の城をもとれる返遣しといはせけ
れハ一益大に悦び浪人をかり集めて勢州木造に
有しかもある秀吉冨田左近将監知信を加勢に遣か
され関万徹も亀山の城にありて滝川が方人となる
大君又信雄もろともの大事に酒井忠次奥平信昌松
平家忠をさしそへらる時に信雄の叔父織田上野介信

包をかへて秀吉と親しみ深かりし今度も秀吉
が方人して蒲生氏郷滝川一益を軍勢とし合せて
勢州嶺の城に攻よせるさいの城を作間駿河守正勝信盛
の子ならびに山口長二郎重政信雄の下知を受てまもりける
城をてに落るはかりになりて遠州より酒井忠次
以下の人数をさし向て後巻をなさしめて上野介信
包等にも人を作間正勝も長島に帰るに先達て
秀吉か信雄のために信孝を亡ぼしつひに信
雄をも失はんとの下心ありけるハその時に至
里信雄か家人等を味方につけんためおほく

その人質をさゝふ瀧川雄利信雄の命に随つてお
めくみを蒙ハしたり秀吉脇坂安治にして守らせら
るゝ時にいたり雄利脇坂がもとに使立てそれ
れ息男が母以のほかに違例し今ハかうと見えけれハいま
安治の御芳志にて志はしのほと出されへ玉りて此
世のいとま乞をもさせまほしと以をもてり安治ハいま
におもひしらそ志をしゆるし給んに何の苦し
かるへきとて送りけれハ雄利やかて引具して伊賀
国上野の城にたてこもる安治安からぬ事におもひ
押よせて城攻んとのぞむ秀吉きこしめしてあれハおのれ

も秀吉にそむかれて雄利にくみせんとおもへれハおのれ
が勢の手際にていかてかゝる勢に向て戦ふ事を
得へきとて以のほかに怨りけれハ安治いそきおの
が母を人質に参らせて討立ぬ其勢たゝ廿騎
またそきけるかり鞭鐙を合せて討ほとに伊賀国に
入て羽柴の御使として安治さしてきたり味方にま
いらんものハ恩賞おもくあたへらるへしとのゝしり
行程に國人等さしこそり馳来り今宵上野
の城を襲ひ攻む雄利かなはじとの多勢なれハしのひ
おりひもそうれもあへて上野の城を落て

伊勢の国に在けり 安治早馬を以て此よしを告
く秀吉大に驚き使をはせて安治を留め彼国
を守らせらる 大君御馬を出させ給ひ清洲にて信
雄に見参し給ふ 榊原康政御前に進みて尾州小牧
山に城跡ありけるに本丸二の丸を立給へかし敵
し此要害に脩築らせ国中一目に見おろして味方の
利にならんと申 大君守入なし給ひ修覆のこと命せ
らる 池田信輝尾州犬山の城をおそひ取て脩築る
大君信雄にすゝめて紀州根来寺の僧徒をかたらひ雑
賀の一揆南海四国の海賊をかたらひ勢を合せて大坂
の虚をねらはせらる かくて羽柴参議秀吉は大
軍をおこし 尾張に打入らんとて先 中村式部少輔
一氏蜂須賀彦六至鎮黒田甲斐守孝高等は 紀州
を防かせ浮田秀家は西国をふせかせ丹羽長秀前
田利家には越中を防かせ佐々成政その余の大小名
手分けして 東海東山の諸道をふせかせらる 十六日
大君信雄と小牧の御陣に出給ふ 十七日森武蔵守
長可尾州羽黒に陣をとる 酒井忠次 大君の御陣
に参り 長可年来鬼武蔵と名をよはれしおのこなる
武勇にほこりて近く羽黒に陣をとる忠次打破て京

家の輩に我国の軍の援をみせんためとて松平家
忠奥平信昌と五千の軍兵引具しくまん楽田羽黒
五郎丸の在しまあしあいゐしゝ焼立て武蔵守か
陣に押よせ長可八幡の森に打出て流るゝ水を前に
なし兵を下知して皆おりゐて待かけたく味
方やかて押よせて矢一ツ射ちらす程こそあれ水を
さ川と渡しておめきて如く信昌先かけして散々
に打破りかゝるを犬山さして逃行を追詰し
打取るくび三百余級犬山にひきし池田か陣に打
向ひ時をとつと作りかけ先つ勇て引てかへりぬ

大君榊原康政に小牧を守らせ給ひ信雄と清洲にゆ
きあひ給ふ此の時水野忠重ハ岡田重善か本城星さき
を攻落しぬ此秀吉さきに尾張に発向あらんとせしに
紀州土佐淡路の海賊泉州に乱れ入しかば発足
延引せり中村一氏ハ先年より秀吉に従ひ戦功をか
さね今泉州岸和田の城をあづかり居しに此度
無二に戦ふて海賊を打退けぬ廿一日羽黒敗軍
此注進大坂にきこえぬ秀吉怒りに堪かね即時に
発足なり紀州一揆おこりを突き二日にのびけるが
岸和田に攻よせたりしを一氏黒田孝高ともろとも

又打退く　大君尾州小幡に出城をかまへ本多廣孝
に仰せて守らし給ふ御本国参河への往来の便
利としたまふ　廿七日羽柴秀吉が勢都合十二万五
千人犬山の陣に到着しぬれば地形を見分けて
て小牧山をえらび給ひし事以の外のあやしと向ひ城を
築かけやうとて土俵を築き二重に堀をうがち
て柵立ならべ石垣陣小屋かけの如くそのひまより
大君信雄と二万の御軍勢にて小牧に出陣しあひ
森長可が陣に夜うちをかけらるゝ上方勢大きに驚き
長可うたれし　はきくもなり　大君てきの柵と堀とを

打ながめ給ひ笑ひて信雄にむかひたまひ　先年長
篠の合戦に御尊父信長公此の如くして甲州の
精武者をうち亡されし　志あらしき秀吉今その古
手を用ひしを　家康を勝頼同様にあしらふ
んとて味方の軍勢いかなる事ありともうごかず守て
多くかゝられと觸流しあらん　秀吉二重堀扎
城の櫓より小牧のかたをみて急に勝負を決せんとし
建札を書て日限を定めんとて　増田右衛門尉長盛
に筆をとらせ明朝一手の軍仕かけは味方には柵をうちし
かはりて侍に一手足を引かせ申しき　用意仕て

は御辺も此の御用意有て志ある事へしとかきたれ
ば高山右近大夫常任此書をよミきゝて徳川氏の
ものなれとは必定也とまた返答いふへきもまし方一
味方をはさけりなといふへし君は御立腹の
まきれに合戦をせられぬとのおんはからん 時も
勝利覚束なからんとやいふ 秀吉これによりてまた
事はらんやとてかの書を竹にはさみし近習 長岡
忠興の侍に命して 敵陣の木戸なる道へはさて
し
さゝせらる 御鉄炮頭渡辺半蔵返書をかきたり
より合戦の日限を佐に陳い何時にても苦し

うくれは堀なとの用意にも御勝手にてら此方
へ御着陣に及ひふや但し主人家康公久しつめ
は三河武士にも兼てかゝるを論といふへし 一足も引
とやるへきかはしてなせれは へも左様の心はなし
まて及やさゝれはと 読みて 壱騎の武者に持せ
おくられは 秀吉公是を見て大に立腹し 常任か推
量にたかはれとやせんとも 秀吉怒と立て己か寺
相をみよとて近習四五騎とかけ出たる旗本の面々
はきまりてく御供の内に合は 秀吉 松原の小
塚にかけ上り 尻をまくりたゝけ打ちらきて家康

さいこを喰らへと呼はりしかと小牧より唐冠の冑に
孔雀の尾の羽織きたるハ秀吉よ打向ひきたるところ
鉄炮を雨の如くに打出せ秀吉振返りて天下の大将
軍に矢の中るものかはとて悠々しと陣につかれ
けるに味方より上方勢の中にちらし文をくれる
其文に曰く逆賊秀吉大恩を忘れ主家を亡ぼ
さんとす信長公の旧臣ハ秀吉と同列なりしものも同
列の身を以て悪逆の秀吉か手下に付く者ハ猫犬に
もおとれりなん心を改て降参せよ一旦の恥ハゆるされ
無しとかきたり榊原康政か筆なり秀吉これを

見て康政か首とりたる者ハ恩賞こふに望みせんと
怒られけるに筒井伊賀守定次九鬼大隅守嘉隆
秀吉の味方として瀧川雄利か籠りたる松島の城に
攻よせたる㊈今月龍造寺隆信五万の軍兵を引れ
原の城に向ひ折ふし薩摩より加勢の兵来り合
せたるを隆信たるかにみて島津か小勢ひの勢何程
のことかあらんとあざ笑て待けるに島津中務
大輔家久義久の子家臣新納武蔵守忠元伊集院肥前
守忠棟に下知して伏勢を二ヶ所にかくしおき
肥前の陣に打てかくそのいきほひをはけしく龍

造寺か先陣さん〳〵にまけたる隆信いかりて本陣み
つからすゝみ入て戦ふ薩摩勢まけんとしけるとく
伏勢又左右よりおこりかゝりて隆信ハ只其
騎馬を乱して逃去られ旗本の侍もこと〳〵く
打死せし敵ハ勝てける隆信のあとをしたひてやかて
首をハ取てけり隆信か妻さる女なりけれハ
政家を世継にたてけるか此の人父にハおとり
てむけにおろかなるを知り譜代の郎黨鍋島
加賀土屋出雲に国中の沙汰を打まかせ二人力を
合せて後見せるによりて国の武威おとろへさりき ㊣尾

池田勝入信輝の号家人に向ひ徳川か勢日々にはせ集る
と見へたり小牧の敵多勢になりつらんと覚ゆ今そ
家康か国にのこる勢多からし先三河国を
襲ひなハ一定小牧の加勢破れ去へしと云
家人いつれも御諚尤なりと同しけれハやかて秀吉
の陣に至りてかくと申す秀吉よくもはかりそ
答ふへしとて返さる明日又来て家康か篠本
柏井の郷人等を催しかの所の要害を搦へ
軍勢ともへしとつのれる道のかたふさかりぬ内に
三河の国に向ひてやといひしかハ秀吉宇大まて

深大の事款をかよはさるゝよし聞え先一戦に利
を得さるへく把くるゐし道のかと一揆の者ともを
かたらひ先入ゐしとて森長可をさそひて堀秀政
後軍にさせて先秀吉の甥三好孫七郎秀次（三好武蔵守か子なり母ハ秀吉か姉か或ハ妹）
惣大将となりて都合其勢三万余騎四月六
日の夜半より打立て尾州篠木柏井にいたり百姓一揆
をかたらひて秀吉も引続て犬山を立て楽田に陣を
構へらる　大君かくと聞召し物見をさしつかはされて敵の
為振伺はせらるゝ八日の夜二更のころ勝入長可尾
州岩崎の城に攻よせける　大君酒井忠次石川数正

本多忠勝を留めて小牧を守らせ　みつから四千の
精兵を引具し給ひ旗を巻き噪をとゝめて三
更の比忍ひしに小幡のさとに馳向ひ給ひ信雄も
その軍勢従ひて御あとよりすゝむ　かくて勝入等
か攻よせたる岩崎の城主丹羽勘介氏次は此とき
小牧の御陣に御供して舎弟二郎三郎氏重留主
をまもりけるを勝入はけしく戦ひて攻おとし氏
重を始め城中の兵残らす打死す　勝入心地よけ
に首とも実検し　堀秀政も従ひきてまつみ九日の
暁三好秀次尾州稲葉にいたりて兵糧をつかひ居た

る所に 大君の御先手に立つる 榊原小平太康政本
多豊後守康重 広孝の子 織田の大将丹羽勘介氏次うし
ろよりときを喚てかゝりけれハ敵ハ不意を打れ
右往左往にさはき立けるを 者これを知りて秀次
身ひとつに成て逃行ける 大君引はなれて進ミ給ひ
一ツの川を渡て名をたゝ祢なる人ハ勝川といふ同
出度名なりとて悦ひ給ふ所に先手の勝軍きこ
えけれハ悦ひに尾州長久手に御陣を進めらるかくて
三好秀次ハさんゝに成て堀か陣に逃来る味方
揉て追かけ行くを秀政大に怒り先手の勝入長

可に人をまとせ陣立直しときを作り鋒先をそろ
え切てかゝる味方なりともいさゝか臆へき志ところに成く
引返れ敵の多勢力を得て一手に成て追かくる味方
己に負軍しけるを見てたるを本多康重一ト勢にて
返し大勢の中へ乱て入りたてさま横さまに切て
廻り康重太刀の目釘打折てその敵を組て首をそ
かく其身も七ケ所まて手を負て引く所を秀政
追かけて長久手まて追はらひ勝入長可も討れて進む
ほる人大君にむかひ多勢に無勢敵しかたくなれと
や図満に御帰陣なりしと 勅欠申せと笑て参へ

かられ高木主水清秀渡辺半蔵守綱物見をうけたまは
りて馳返り勝をとるへし此ときをはいそき御馬を
よせらるへきよし申けれとや本多正信何ふなき勝をせん
より岡崎に退きたまふに老れとや若人言葉を
そろへ居士言になりて治世の事ハ御辺の御はからひ
にあるへし合戦の事に於てハ何をか知りたまふへき
とや　大君両人の詞に随ひたまふ榊原康政をも召て
御前に出られしハ　大君康政か手をとられて嬉し涙をぞ
ながされし先に二度の合戦に負軍しけるとゆへて
汝ハかねて討死しけるらんと思ひしとありけれハ康

政こたへて　君の御しおさんかきりハ何とて命たえて
ましくそんしれとや申まし　大君今ハとて御勢を揃へ
て出たまふ堀秀政か陣中御馬印を見んておこしたまへん
ろふ所を土岐山城守定政 始ハ養父の姓を称して菅沼藤蔵と云 従者二人
と具して御先をかく池田か勢のたてむきを見んて主従
三人鎗をいれて敵をまはし先に進む敵三騎まて突崩し
従者又一騎を倒き首四ッを切る残る郎従来る
ほく敵をさんくにたてらふ程に御勢もみな寄せ合せ
けり井伊兵部少輔直政一方の大将をうけ給り小
高き所に上りて鉄炮をそろへ敵のよこいより打かゝる

矢も丸も雨あられの如くにて秀政さんざんに敗北し
岡田に逃返る勝入早馬にて追かけきたりし節ありまく
と勧むれど聞入ざりけれし直政山よりおりて縦横にかけ
やぶり　大君も信雄と共に一手に成て戦ひあへハ森
長可ハ討れしを無念の合戦ぞとて　槍引さげて
戦ひしか鉄炮に頬を打ぬかれ馬よりどふと落て
死し敵軍大にみだれたり井伊直政か一軍ハ鎧も
旗も赤かりけれハ京家の者共直政を赤鬼と名付
しハ此ときよりの事なりけり味方ゆへに池田勝入
を目近く追詰けれハ是までとや思ひけん床几に

かゝりけるをまつ永井伝八郎直勝落合てくび
を取る年ハ此ときにて四十九歳嫡子紀伊守之助生年廿
六歳安藤彦兵衛直次かためにうたれける勝入か二男
池田丹后守輝政実ハ父のうたるゝをも知ず一所におゐて討死
せんとて取て返せし輝政の家人番大膳そのころ
いまだ馬屋の馬飼なりけるか只一人追つきて馬の口に
すかり引返して一鞭あてけれハ輝政怒て不覚の奴なる
といふままに鐙のはなにて頭をくだけよと蹴られ
けれともちからをもひるまれヤア若君こそ不覚なりと
て片手に轡をしかと取て片手ハ鞭をあてて駆去

馬ハさんざんに逸物にて鞭を志きりにあてられて飛が如
くにはせゆけ共輝政腹にすゑかねて怒りけるに
蹴しかれに頭をいたく蹴られて血偏
身朱に染れ共捨放ちやらざりしハ力及ハ共いうき
のひろく今因幡伯耆三拾二万五千石別家三万石二万
石備前岡山三拾一万石余又二万五千石一万三千石の大
家となりしハ此馬飼が忠義に依てなり 番大膳才覚
人に勝れし高名をかさねて大臣となる 抑池田の家ハ
摂津国の住人池田九郎教依 楠河内守判官正行の
てき腹の子を貰ふて池田十郎教正と名乗り 後兵庫介と云

足利義満将軍に従ひし故を以て楠の子孫なりけるを
かくまへその末孫紀伊守恒利なるハ此勝入ハ父輝政の
祖父なりけるにそれハさて置味方近る敵を追かけて首
壱万五千を取られける 内藤正成高木清秀ニ言葉をそ
ろへ味方の軍兵従ひ来てハ秀吉ハ決断をやき人に
てハ敗軍をせずハ必ず来る座しも退しあまふ座る
らそとやを大居尤にして急に軍勢を川上ヶ小幡の
砦に入あまたの清秀とやハ初め水野兄弟に従ひ
し武勇のほまれありし故御家人になされけり 河今
内丹南壱万石也 かくて勝敗軍の注進秀吉の陣に聞へけれハ秀吉

大に怒て安からぬ事かな秀吉向て軍をなし始より
此要の要害を守りたらん者をよく守らせ其外軍兵
一人ものこさす来るへしと陣しけるを馬引たて
鎗かけられ冑着てきらりと寄る処や大将軍の陣に貝
吹鳴しさせて先陣をてに打出る秀吉の旗門外
に押立たり二番三番と押続いて十六番まて出ぬ
されハ秀吉楽田を立て長久手さして馬を馳せ給
陣ハ捨ても引きらせて酒井忠次小牧の御留主を守らせ
置をきらて諸将とそ計り楽田をおそれさんとて石川数
正俄に召して秀吉におもむくをうかゝはせ忠次か議に

随られ評定閣ちしになりけれハ本多平八郎忠勝か云
抑今朝よりの戦に味方はやられぬへし御先をかけん
とて馬武者徒武者五百人三手に作りて敵の多勢を
道をさへきりて行ほとにその間四五町に迫りて
石川長門守康道は数正か弟多勢引はなれて矢比
敵と間近くなれハ足軽に命して鉄炮をうたせけり
さりけれハ本陣につゝきて馬をあゆませらる秀吉御覧しハ誰そと
尋給ふる近習の侍御覧して本多平八にとや秀吉
感して遮中しきものかな家康か目をかけらるも尤に
とやさるかゝる所に永井与次郎か馬はしらせ来て旗

なかりけれハ高木もろともに飛かゝりく 敵に向つてきたりし
ろ永井ハ跡より追て行 平八是を見て一鞭打て〻
るをまち永井をはたと馳ぬけて敵の中に追ちらして終に
その馬を乗返し永井を乗せて帰りける秀吉の兵共
にくき本多か振舞なりと馳よせて撃ちらして通りけれハ
といへハ秀吉かろく制して龍泉寺に至り長久手を見
おろせは死骸山の如くに積みかさなりたり家康ハ勝
ほこりてや居らんなとといへハ戦ひ終て家康の御旗ハ
小幡の方に向けて入ぬとありけれハ秀吉手を打て花
も実もある家康なりと感しられきとなくに小幡に攻よせ

んとせられしを 稲葉通朝すゝみ出て日もはやく
暮てけれハ人馬もさこそ疲れ候らん今宵ハ此所に御
滞陣ありて然るへけれとや 秀吉その議に随ひて家
康信雄一同に小き砦に籠り居りて天のあくる
なり明らの朝に押よせて一戦におよふへしなと
思ひしとみえてとゝまりける本多平八忠勝
ハ年来の忠勝なる身の者いへとも軍法をはたらかせ候
水野房の御勢をもくらへ見るへからし 一ツに成て今宵龍泉
寺に夜討せハ一定犬山なりとも敗るへきにして秀吉を
くひたて見事に入れ申ましとや申せ 大君御たちのいそし

しくこそやたまはれから夜軍を危きものとらし
今日於戦味方の利あらくなりけれハ只此まゝに軍を全ふ
せんにもしくはなしとて小幡の砦を出たまひ夜半に小牧の
入らせ給ふあくれハ十日秀吉かくとはしより家康の軍
きも抓行の如し なほ及ふ所なけれハとて又楽田に帰り
十余ケ所に砦を築て数日の間持合ひしか是より以前
秀吉軍兵をさしわけて勢州嶺の城神戸の二城を攻落
し筒井定次等松島を攻ける一ケ月余なりしかと
守将瀧川服部等かねての如く防き城戸押深き
折て出ける度々に及ふ定次和議をもつて城中に

兵粮もつきてけれハ城をあけわたしけり五月朔日秀吉軍
を引んとて諸将をわかして砦を守らせしか
今度大軍を起しきて何の功もなくその上森池田
なんとの大将をうしなひ士卒あまたうしなひてそこ
く返るハ天下のあさけり草となりなんとて信雄か手
に付し利井の城に攻よせる城主利井駿河守重宗
子息弥八郎重茂叶はしとして敵の囲みを切りぬけ
て勢州さして落行きぬ秀吉又濃州竹鼻の城を
水攻にて今月筒井順慶勢州の陣中にて忽ちに身
煩ふる出来て本国に帰りいく程なくて死去 年三十六 四

郎定次家をたくはへの定次ハ順慶か妹箸尾宮内か妻
と成て産しまいらせしを兼て養子にぞ定む」六月竹鼻の
城も落りけれハ秀吉ハ美濃の大垣に陣をひく蒲生氏
郷(飛騨守)秀吉に随て高名たびたびなりしかバ恩賞
として勢州松島十二万石をたまハらる森長可の舎
弟右近大夫忠政に兄か遺領をたまハらせ一柳市助直末に
竹鼻三万石をあたへらる(今播州小野一万石一柳對馬守末胤)」大君酒井忠次
に小牧をまもらせて清洲に引かへし信雄ハ長島に皈
らる　さりし先信雄の下知として尾州蟹江の城
を作間駿河守正勝にまもらせたり　正勝手うけして

前田甚七郎長種に前田を守らせその弟前田与平
次定利に下市場を守らせ山口長次郎重政に大野を
まもらせらる今度又信雄の下知として作間正勝に蟹
生の城を築かせらる正勝ハ前田甚七郎か父なる前田
与十郎種利に蟹江の留主を守らせて己ハ蟹生
にはかにそむきけり秀吉の味方瀧川一益はのとき木造
にありしか蟹江の虚を伺ひ与十郎をすゝめて
降参させしかバ兄弟の子甚七郎与平次ともに
瀧川に方人して山口重政をも引入れんとて使を以
ていひおくられけるハ汝辺の母親蟹江の城中にあり我等に

一味しあらぬにおひてハ母親をは殺し申へしとある
重政申入れして汝等恩を忘れ義に背き畜生にお
とりし乱母を人質のために作間屋に奪はせし上ハ
汝等ハ盗ミ入て殺されたるまでに何とかれハ
作間屋の下知うけて大野の一城ひとつからくは攻める
を攻よ城を枕に討死せんのしとてちはれそし騒かれ
十五日一益九鬼嘉隆と舟手の勢を引て大野に攻よ
せる重政出迎ひて焼草用意し舟に火をつけしかれ
敵おそれて退られ十六日一益蟹江の城に入らんとせしに
大君かくと聞給ひ清洲より御出馬あらんとて御同

勢催促の回状を御祐筆にかかせらるその文言に我
これより出馬しと書きたるを御読んし答の字ぬるし
き字なりと火急の文言一字もかかりそ免なる由なきとて
書直させ井伊直政成瀬小吉正成と一番にかけ出し
あひ御同勢も御あとより追々に馳加はる信雄
も軍勢随へて兼ての合ふ折から蟹江の海引潮に
て干潟なりけるか一益早舟おし切て真先に進む
を味方の大勢きそひかかりて打破られたその家の
兵形とも数しになりてたきかされ一益危き
命をからうしして蟹江に逃入りぬ是を味方せくさ

も蟹江の城を取巻く十七日嘉隆瀧川か勢と兵船
をならへて下市場の城に赴く岡部孫次郎長盛山
口重政とたかひて舟にて出逢へ打あひけぬ大
君重政を召されて逆徒にくみせさる条感しましまし
て鉢かねる御馬を給はるさいの重政か先祖をた
ゝめらるゝに周防国大内義弘の甥権介持盛か孫に大
内孫太郎任世といひし人陶尾張守か乱をさけ
て尾張国星崎の庄に来り住む其子修理進盛幸
累代先祖任世し地の名によつて山口と名のる盛幸
か孫平兵衛尉盛政にいたつて織田信長公に仕へ 是重政か父なり

たり重政作間左衛門信盛か手に属き居たりしか
信盛死去ありて高野の奥に篭りしに 前巻にくはし 彼か
手の兵二万余騎おのかさま／＼になりゆきしに
重政ひとり信盛か先祖をうやまひて同しく高
野に赴き祭祀なくて信盛の子駿河守信勝をた
すけて信雄卿の身内に加はりし其後大君に仕へた
てまつりて高名をかさね叙爵して修理亮に任
し常陸国牛久の地一万石をあたふ 今は同し 十八日石川数
正安倍信勝両人信雄か勢を引て前田を攻落し甚七郎信
種逃失せけり十九日大君信雄と共に下市場に

攻よせけるに此城のしろハ廣き沼にて人の通路な
らされハ城中にもふせきの用意せさりし　大君御覧
して此沼ハ萑葦おひしけり多けれハ根ハたかひ
にからみて渡るへし渡りて見よとて二三人はなちしかハ
簀の如くにて渡られけれハやかて此沼より人衆
をくり入給ひなんなく城をおとして前田与平
治定利かくひを斬　味方一手に成て蟹江によ
せる榊原康政をはしめて井楼をくみ立城中を見お
ろし弓鉄炮棒火矢にて昼夜をわかたす打けれハ
数日ふして城中難儀に及ひしかハ九鬼嘉隆

大船を用意して一益を迎へ入んとて海を渡し船
ハ殊更しまみかくれたる処を味方の勢見付て加
まけ　嘉隆ハ小舟にのりて逃のひぬ一益今ハか
なはぬとして降参を取ふ信雄かたへしか一命をゆ
るしたまへと　大君にもさしのへられハ　秀吉より仰らし
領地のかはりに至るせ前田与十郎種利か首を打てお
くりなは命をハ助け得させんと仰下されけり七
月一益与十郎か首をうち誓紙をさし上て川
をのかれぬ秀吉蟹江の城攻を守護し落着せんとて
て大垣より赴かれしかとも期に及ハすして勢州桑名

に陣をとゞむ一益木造の城に陥らんとせしが留主
を守りたる冨田知信一益が振舞信雄に方人して
うらがへらんとうたがひなく城に入れをせんこともなくて
京都に落ゆく秀吉冨田がはからひを感じらる
伊勢国安濃津の城をたまひ一益の卑怯をせめらる
越後に追放せしめし程なく身まかりぬ」大君
秀吉桑名に在陣ましませれ船にて同国神戸
に渡りたまひ諸所の砦を修覆させて防ぎの用意
しましは秀吉又大垣に陣を引く大君も又清洲に御
陣しまふ八月関万徹勢州木造の城に籠り蒲

生氏郷ハ同国縄生に陣して信雄の勢と数度の合
戦勝負をつけ秀吉軍勢を尾張にさし向け所々
に砦をきづかせらる信雄ハ尾州の永村に陣をとる
大君ハ同国岩倉に陣しまふかゝる所に越中の國主佐ゝ
成政羽柴に叛きて織田にくみするを通ぜしめ
加賀国に出んとて一万五千の勢を引て自身の
旗下なりける能登の国末森の城に攻よせ城主奥
村助右衛門永福かたく防ぎてちからを尽せ越中
勢蟻の如くあつまりて外くるわを破る永福命を
かぎり戦ふて本城にたてこもる永福が妻負かゝち

廿日まてくゝ志るし勇氣ハ巴半額にしおよひし馬に
打乗長刀かいはさみ城中をかけ入めくりてはさら
く者をうちふせかこふる者を志りそけしを士卒の氣
勇ゆまけりけり折ふし加賀の國の前田利家後巻
して寄手と城下に戰ひ成政打負て引ぬ九月秀
吉尾州茂吉に陣をとられる　大君信雄ハおの処に御
陣をうけさる　廿一日　大君にはかの陣中を見巡らせ給ひ
しか秀吉ハ五万の勢御馬印をとりて金の扇のまとき
きこえしるとて以の外に騒動あり秀吉おそれ夜のうち
に陣をひき諸所の砦に番の兵おかいて大垣に退る大

君信雄も清洲にかへり給ひ十月再ひ小牧の城を修復
して榊原康政に守らせ酒井忠次に清洲をまもらせ
て岡崎に御凱陣なる」先達より秀吉脇坂安治し
て伊賀志ナを隨へさせしに西国の人萬て信雄
を怨るもの多く大家の輩皆安治にくみしたの略
西国ことな秀吉かたになりしかハ秀吉筒井定次を
伊賀守に移し山城伊勢の内にて七万石加増しけ
王筒井年来の拙宮松倉右近重正中坊飛騨秀
正等の數人大和より随ひ従りその余の大家多く
ハ秀吉に重代の所領をうはゝれぬ秀吉ハ大和一国

を種ちぎりの弟秀長にはらん志摩一国を九鬼嘉隆
にあたふ　十一月秀吉八万の軍兵を随へて勢州羽津に
陣し織田信雄同国桑名に陣せ秀吉の心中に大
君信雄を助けあらんほどは叶ふまじ信雄
一人はあざむき安し　大君のすき図謀り出しあらぬ
内に和議をはかりて軍をやめ後日こそ仕様ある
事しとおもひければ冨田左近知信津田隼人信季を
使に立て秀吉先君信長公の為に逆賊明智を亡し
功ありとも一點のあやまちとてはなしそれに義濃
尾張の両館信雄信孝人の讒言を御用ひあつて合戦に

及ぼしかは秀吉もせんなく軍を起しぬ三
郎殿信孝御自害のことにおひても秀吉今以て
心安かられ存しれひぬ今日よりおこゝろを改めら
降参仕奉りなば程に秀吉が主人と仰ぎ奉るべ
かしといはせけり二人桑名まで申よしや入りしは
信雄大に悦び即坐に承知の旨申されし　十一日城
下の矢田河原にて誓せんとの約束を秀吉近習を
差々引連れ河原に行て信雄を出迎へ首を
地に付け天道の加護に依て再び尊顔を拝し
たてまつる事生々世々の面目なりとや信雄ゆかしく

よろこびける 大君ハ秀吉再び羽津に陣をとらす
なされ 軍勢を引て清洲まていそぎかへりしに あ
家の和議をやとそのひしき御氣色損しかる
石川数正を悦びの使者として 両家に告いさ
る和泉紀州の一揆根来寺の法師と 大君にくみし
て度々大阪に攻入り 長曽部元親なり押して
南海四国の軍勢を催し 舟にて乗りて阿波の湊
にあつまり紀州をとりの国主畠山左ヱ門佐貞政領地を
をもつて引さかり居りしを 大君之を見て軍を
起させ玉へハ紀州一国一時にしづまりしを天下かさまて

大君の武威を恐れしは 今度織田家を助け義を
唱へ長久手の御勝軍ありしかハ御威勢すさまじく盛に
なり羽柴身内の人々ひくにたてろをかよハせ西国の
大名小名恐ひの使立て御味方のなりや送り相撲の
北条も近ころ御縁家となりてうやまひにしあ
はしかのとき畠山貞政長曽部とをかり軍勢を合
せて大坂の城攻あそし 東海道にも打て出て秀吉の
うしろをおびやかさんとてをてに出陣の日限を
定め元親かりとより使立て 大君にかくとや 大君
すさまじき口をしきうちに 此事十日すぐく ゆうべる

て秀吉を中にとりこめ前后よりかゝりて皆殺にせ
んものをと今ハとや和議とてのひ力及されと宮に使
者帰りて此よし申入れけれは元親も本国に帰り紀州
の者ともちりしになりぬ秀吉大坂に帰り冨田左近
津田隼人を使者に差し　大君に中直りの事
申をふ織田信雄も瀧川雄利して頻りにすゝめ御
申さる　大君宗徒の御家人を召して評定させけるに
石川数正すゝみ出て今羽柴参議ハ天下大半を随へ
て諸大名おそれ服せさる者なし　君御領内の軍
勢ことしを僅されとも羽柴か勢のすくなからし

足られして北ハ上杉あり東の小條か心中も
はかりかたし　三方にてきをうくるハ長久の謀に
あらすこやうに御中直りあるへくのよしを
申せハ　大君大に御氣色を損し　中直りあるか
義にほろほろぬかをとさて評議ありけれは我
軍勢少しとて秀吉をおそるへきやあるへき
今に及んて勝敗を決せすしてハ更にいつをか期
せんとて使者に對し破談の旨申けらる
今月参議秀吉従三位大納言に任せらる　越中国に
佐々成政加賀の勢と数度の合戦雌雄決せんと

成政心中に織田信雄ハ柔弱の人なれハ相手にならされハ
徳川殿と一味して都に押て上る企しかて軍
をやめ病氣を披露して近習の侍を従へ引具し
小路を歴て十二月大君に見参し物いふ拝頼
ハ近日大軍を催して都に攻上りけれハ成政も
国中の勢のかけを友つき御供仕けれハ両雄ちか
らを合せて上洛したらんにハ秀吉を押しか
たけんる事掌のそのを見る如くなれと憚る
氣色なく述けるを大君御會釈ありて家康之
秀吉とさせる遺恨のすちあるにあらねハ先達て長

久手に於て合戦に及ひしも信雄のためなれハ依
る処なり今日かの両家和議とゝのひし上ハ此方
より手を出すへきいはれなし其上家康より秀吉
を怨るゝ事あつて上洛せんにハ味方の一手たるへし
事なりかねぬ御辺の小人数をさのみ申に及ハす
去なから後日秀吉万一越中に攻下るにおゐて
加勢の勢をさし向けるへく今度来られし
労ひし御芳志に報ひられなんとて返されし成政
せひなく尾張に立かへり信雄に再ひ合戦をすゝ
めけるされとも叶ハねハある日酒井忠次大君の

御前に参り成政ハ本ハ織田家の小者にてありしかとも
かゝる際にて 君に對し 両雄なんとの申条無礼之
義絶申すへきにあらすといふ 大君仰して越中への
道中をうかゝはせらるゝに山谷嶮岨にて春秋冬とも
雪きえされして 御軍勢の通路あるへからすと申せ
さるハとて使者を立て加勢のことを御所望ありしに秀吉も
方勘兵衛雄久をたひし使者に差し中直りのこと
申さひ又御子息の内壱人養君としまゐらすへきよし
を申させ北畠信雄（小畠の養子いらせまゐらす 織田とも北畠とも云ふ）小牧長久手御加
勢の御礼申さんとてまつりし參りき御妻子のまゝ さ

御くに執成まゐらすれハ 大君異父の御舎弟久松定勝
を上らせましましけるを御母上やすからすおほしめされ
定勝も兄今川に人質となりてやりて甲斐の武田にと
らわれ雪の中をかち跣にて逃候ひしを手足の指落さ
ませきしとなく〳〵申させ給へハ（此事二巻目の末にくはし）力なく萩
九度上らせまゐらせ給ふ事を定らる（御二男萩九度の事前にいへり）此年十二月
の末大坂に向まゐらせ給へし秀吉かくし悦ひ頓て元服
の儀をなさるまゐらせ（御年十一）羽柴秀康と名のらせ河内
国にて所領参らせ（一万石）此年上杉景勝使者を都
に上せ永く羽柴家に一味あらんと申送る

天正十三年二月 大君吉良の城をきつうせらる三月
大君疥俄に出来て日ましに御心地煩しく今はか
うよと見へさせ玉ひしを宗徒の人々をそさせ玉ひ御ゆとの
するもおゐしいはしなふ 本多重次御寝間に入
て三人の医者をまねかれ中にも 大君用ひあられして
またや療治をさせ給ひし志深くしたり人間の運命は天
に任せ死生あるをおそるゝは命を知らさるなりと宣ふ重次
氣色をかへ孝をはけまし まての医者療治の仕様を
きこしめしはられさへきる事をせんしてかくしく最後
を一同に決しあふはつやし 重次か悪業におちられは

若し一旦御他界あらんには御嫡子はいまた御幼稚に
ましまし 大猷三方にひかへられ御家の滅亡遠きにあらされ
重次生なからかゝる憂目をみんより腹かききらんとき
て冥途の御先かけ仕らんとて沈と座して退出しけれは
大君いそき呼もとさせ玉ひて 重次か申せし医者をめ
さる医者来りて灸治せんといふ 重次艾をひねつて
をゆる一夜のうちに沈ひへて快気ありし 大納言秀吉正
二位内大臣にうつりたまふ以前 天皇御年
高く仙洞につかせ玉はんと思はれけれと仙宮破損し
思召に叶なせられ秀吉御内 勅をうけ玉はりて

造営を前田玄以を普請奉行とし　天皇御感の
あまり微に内大臣の　宣旨を蒙る秀吉微賤より起て
族姓さだかならねハ志たしかたく平の秀吉と名のりしか此時
まてハ藤原秀吉と改めらり織田信雄従三位参議より
正三位大納言にうつりし初め紀州根来寺の僧徒世の
乱に乗じ兵具をたくはへ兵粮を蓄へ浪人をかく
まひ近頃にハかきめて勢ひ日々にしきひこりぬ天正の初
年信長公征伐しありけれと要害に拠りつてまさ
りけれ織田家亡ひて涌れしきひいう所々に砦を構
山によりて水をへたて兵粮山の如くたくハへ一揆の者共
たむろに組し威勢近国に振ひしを羽柴内府かねて
ふくみて去年小牧合戦のとき　大君に方人せしを以の
外に立腹し　十万の軍兵を引て紀州に赴かり諸方に
わかして砦々を攻らる廿二日筒井定次堀秀政根来寺
に攻よせる敵の軍勢千六百余人湊に盾おかける秀政か勢
みおそてかゝる三好秀次秀政と左右よりはさみうちにし
逃るを追かけ追かけ砦の木戸まで攻よせたりかゝる所
に定次か勢より棒火矢など放しかけしかてきしの焔硝の
櫃に射あて砦の中ハ雷のおちたる如くひゞき渡りて
人馬のはくはきみぢんになりたり諸方の砦たむろを

焚てられちりしにおち失せぬ廿三日羽柴内府六万人の
ほかせを引て根来寺に迫りまへハ欺ハ内府の旗を入て
いつくとしなく落うせぬ内府下知して火をかけられし
に凡四日五日焼けたりしを佐ひに雑賀のかたに向ひ給
所々の一揆とも皆降参し太田の砦一ヶ所要害を
こめて降らせて内府下知しくて土をつきまいし紀
伊の川を堰きかきしかハ叶ハれして降参せしその張
本五十人をとらへ磔にかけ又熊野をも攻おとし山
の奥谷の落ち賊のまくらにてなくなりまいり
関所をとりのけて商旅の便利よくしてけり根来の

法師原遠州に逃まいりしにより大君これに髪を
立させて根来組を立させ最初高野の山法師とも勢
にまかせ百姓の田地を奪ひ兵具をはつし浪人をかく
まひおきし合戦の用意せるときこえしかハ四月内府の
仰せとして田地兵具とも没収せられ浪人とも追払ひ
数ヶ条の禁制を出されとし違背せるにおひてハ
根来同様にや仕んとおほせられハ法師とも恐おそれ
御下知に随ひ紀州一通平らきしまいり紀州和泉
の両国を羽柴秀長に加増せらせ紀州岡山の城を
佐りせられしが今の和歌山の城にし越前国主丹羽長秀

卒去す五十一才子息加賀守長重世をつぐ長秀か先祖
は武蔵の児玉党の中ころ尾張に移り当国の守護
斯波武衛に仕へぬ長秀十五才のときより織田家に随
ひ常に一方の大将を預かり向ふ所破らずといふ事
なし されば織田家御内にして丹羽柴田といふ者
なくは世の人志をもとむる事なし秀吉もこれにあやかり
う名をもらひ家の号一字つゝとりて羽柴といふ名の
りたり長秀は正直なる人にて秀吉織田家の下部
たりしかとも我上に立といへとも故主の大敵をうちし
功ありとめでて心をよせけるかその身につきしかは秀

吉の信孝を失ひしも秀信公の御ため危かれども
はかるまじいつしか秀信公をもはかりみもせしは向へ
さへ信雄公をも失ひ争ふせんとしつひに天下の事を
自ら知りぬれは心くやしきかぎりなしわれと今
は秀吉をもかたらんする我力にはいかにも叶ふべからされ
かくて世にあらんへて天下の人にうしろ指さゝれんよりも
つらしと思ひ居りける年ころ積聚といふ病ありけるを
されて命をてにはきたんとおもひしにかゝる病こそ我命
失なんあるは浅ましき敵にこそあれいかにも敵ぞ
たてそむるしくかなるへきとて腹かき切て腸くり出し

てみるに奇哭のくせものこれて出ける形石亀の如く
にはなし鷹の如くとりつて脊中に刀のかたちあり
跡かたなし当時評判大きになりぬ内府秀吉医官に命
して秘蔵させられける今月大君甲州を御巡見ありて
長久手合戦に高名せし者それぞれに恩賞下されけり
けるしかるより以前内府秀吉公ゝして長曽部元親に
降参をすゝめ伊豫讃岐を差上させられけれ土佐阿波二
国を切り取りたる侭に下し玉はらんといはせらるれ
元親命に随はざるによりて今月秀長秀次に舟手
の勢随へて阿波に押入り浮田秀家さぬきより入て

小早川隆景に伊豫より押入らせられける長曽部元
親出むかへて羽津に陣をとる 秀次は和気の城
を攻おとし 秀長は一の宮を攻落し両軍一つになり
成て又木津をも攻おとし七月に至り秀長の威風
におそれ攻るに及ばずして降参に出る城数ヶ所
なり仙石久秀も先陣してさぬきの八島の城を攻て
落しぬ 薩州 小早川 備州 浮田 の勢向ふ所勝ずといふ
ことなかりけれバ長曽部元親おそれて和睦を
ちがひ人質を差上させられ内府秀吉かれが降参れ
おそきをせめて三ヶ国没収せられ阿波を権

須賀家政に玉ふり（今に至て廿五万七千石） 讃岐を仙石久秀に玉ふりく
（今但馬出石四万石 仙石道之助） 伊豫を小早川隆景に玉ハりり 讃岐の
二万石十河存保に玉ふりて久秀か手に付けるとそ
のか三国に名を得て多年長曽部か手に付し
者ハ之く没公せられ河野氏も小早川にかくり
人となり程なくむなしくなりぬ 内府秀吉征夷
大将軍になりんとおもはれける本朝の先例源氏の人
に限られハ此官をゆるしかたく此時かの将軍
足利義昭毛利家の仕送りをたのミて京都に居られし
を幸ひのことにして秀吉その猶子になりんとて人

していをせけるにそもし此事承引なくて御身の一
生涯栄耀に送らせ申さんとはかり義昭秀吉の下賤の
身なりけるを嫌ひて承引もなかりし時に菊亭右大臣晴季公
秀吉と交り深く内々のことハいつもいつも相談に加はり
玉ひしか秀吉に内意申されけるハ関白の職とや
ハ上なきものなる征夷大将軍なとの及ふ所に
はあられは其辺たりや藤原を称せらるゝを関白になる
まへ足利なとの養子になるへかるハあるへしハ秀
吉大に悦ひ時の関白二條昭実公になぞかけて隠
居させ奏聞して遂ひて関白となり従一位に

昇進せらるのことなくれを定らる一族家人ごとに品に依て
叙爵あり朝廷ハ兼て先例をおもんじまし中昔ハ
のかくあらためられたる旧規に任せ百官の拝任
天皇の御たかへらせまし任せまゐらする叶されし元慶年中
藤原昭宣公関白となりたまひしよりこのかた七百余
年他家よりこの職を望む人なかりしに下賤の秀吉
今度あるうちにおいてねがひ申せしかど天皇安からず
ぬこるに思召されしかれども公卿僉議ありて秀吉の威勢に
おそれまひはゞかりて勅許あらせぬかく思召すも我まで
にならせたまひし藤原の姓を偽りて名家をもうけさし

とて又豊臣と改めまいらせしへて名のりし一族そのほかも
出すことなかりける参内の日諸国の大名京都に参勤
せし面々ことごとく御供にしたがひ行列の美々しき事前
代未曽有のことし大納言織田信雄ですら主すぢの身と
して御供に随ひ奉られしとこそきこえてき豊臣関白ありて
天下を大半従へて毎年の蔵入二百万石金銀ともち
くだり連年の合戦に家来共骨折ぬ者へして
たくはへ置かれしとて京都の町中にて金五千枚銀三
万枚をさゝげあたへかの朝より日々これに及ぶ見物の群
集おびたゞしかりき
此時の金銀を枚といふハ今の大判の大きさ
をかりにして四角に入用にまかせ切て使

如山諸国の金銀山より丁銀豆板を作り出せしを数枚と云ハ皆四角なるを云 閔 真田阿波守昌幸又称き

承りしを委子細をたつぬるに今年北条より 大君の御

許に使立て拆両家の好こむすひし時 武田か所

領せし国々をわかちて甲斐信濃ハ徳川家上野ハ氏直

領せんと約しりひぬそれに信濃の真田か上野の国に

乱きしかりて沼田の庄を取て押領せらる事奇怪と

云遣し速やかに早く其狼藉を留めさせらるへしとて

申ける 大君此よし申遣されハ真田ハ沼田の城を

さつて北條にさけあたふ事なしと下知しまする 昌幸

称り此沼田の城と申ハ古主武田家もいまそかりて又徳川

家も称されも昌幸ハこれらの武勇によりて攻取き

る事なるいかてたやすく人手ニハ渡すへき 北條のたのみ玉

ハんにも御辞を称りて攻取らるへきやと作ら

せ玉へと差遣しせ 上杉の家人須田嶋津両人に就て

景勝に申入るゝ昌幸むかし 北條に随ひ居形また

むかし 参らせしる事 既に本意を失ひ 後悔又及ひか

たし 昔の様をそなきかへらるゝもの雑義をもさへひ

玉はんにも子息源次郎 幸村して長く御家人の

列に随ハしめん又侍百騎 常に御陣に従はせて

御馬の草刈らせなん 況や昌幸ハ 二心をそんせは

微忠を抽んずる誓帋の趣お違ふまじくそうらへとて牛王
宝印の裏に起請文書てたてまつり景勝よりも越後国
新発田の城攻て居られしかはよし少て真田めされし
然ば景勝を殺て北條に従ひ北条を見あはせて家康
に降り今家康を恨てくる方なく又景勝をたのむ
ものせん方やなからん今かゝる前悪をにくくと
は急難をすくハ孫ハかゝり忽ち亡ひなんずるも不
便也又家康が武威におそれて景勝ハ真田を見
捨られきいましんも口惜き次第なるとて降参をそ
受られける昌幸又豊臣関白へ味方の事を恃し

られしハ関白上杉に下知して真田助くべき旨
仰下さる　大君真田が叛逆を悪ませ給ひ大久保忠
世等に七千の兵を従けて打手にさし向らる　景勝
新発田をさしおきて河田本城を大将として越後信濃
の軍勢都合六千五百人上田の城にさし下し八月
関白十万の勢を引て越中に攻下らる大納言信
雄も従ひて越中国主佐々成政栗柄峠に盾篭り三
十余ケ所に城を構へられ秀吉軍兵を手分して
一ケ所も攻落し佐々が本城富山を攻られけれハ成政
ちからなく髪をおろして降人に出ける関白の命にし

て越中を前田肥前守利長に玉ひ〔利家嫡子〕成政を京都
蟄居せし給ふ今度の合戦に丹羽長重か軍勢を
も催さる（長重十五才）故に父長秀か遺領のまゝにいらるゝとも
宣ひ出さるゝ旨もありけれ丹羽か随一の家人成田弥八郎寛
徒の傍輩を集て仍てそ我等か故主ハ似しも織田殿
の御恩にかくましし侍るうへそれを秀吉といふ無道人
にたゝかうきて彼家の天下を奪ハもあかし事一生
の不覚にあれそ又大恩此君の公達をたすに失ふ人のい
かて傍輩の好みをおもひ此をさなき人に大国まか
らせんと思ふへしや得うしときハ時失ひ安きハ勢ひし

と云もてひんなる家をいまた勢の失さらんその内
みかたの越中にてつふんさかうひ織田殿の御ためなる義
兵を上け佐々とそさそうて廿七し故主の恥をきよむ
んすいふる仏の供養もまたかうやつくしいふか
にと議したりけり此事早くも関白にきこれ成
田速に死刑に処せられき長秀か遺領越前加賀の国
をうたひて本領あれハ桐違あるをとて若狭の地
にかへし越前の内廿九万石をさけて北の庄の城をも
堀秀政に玉ひ村上溝口をそのまゝにはけりと関白み
つから近習数十騎と越后の糸魚と云處にいまか

上杉景勝に兄弟せんといひけれバ景勝関白に一味の
由返答しけれバ是一ヶ年にもみたざるに天下の権
を司る身と戦国の中にして多くの難所をこえ
又流石の侍人洗れてきたるに感服しかのミならず流
ら十二騎にて参り誓いをまもりし関白又金森五郎
八長近を飛弾の国にさし向らるゝ国司姉小路頼綱卿
をうちとし飛弾一国長近に給はる　信　大久保忠世等
の勢信州におし向て閏月二日真田か本城上田に攻よ
する昌幸先越后の勢を上田の城におひ入かきてよる
身八々の勢九千余人小県山に陣をとれ上田の城下こ

柵立ならべ城外に伏勢おかれし城中より打て出てさき
と打負て逃る処を味方追かけゝれバ柵の内より鉄
炮霰の如く打出し昌幸北野の陣より馳向ひけれバ
城中の兵もおれて返し四方より打てかゝる味方敵に
敗北しほうぼう逃る処に伏勢又おれてかくされまし
打負て逃る所を昌幸あらけなく追かけゝれバ鳥居元忠
平岩親吉みを留て戦ひしか藤の森にてうち敗れ
大久保忠世手勢千余騎にてあんかりしかどもはし
て利川をおこさず昌幸川にむかひ陣をとる忠
世又川を渡して戦けんとて親吉元忠にとる両人

辞をそろへ敵勝にほこつて味方ハ油断せぬ中へ何ぞ
とて出るにハ及ばずとて中にも昌幸も引て居る三日忠
世柴田康忠と筑摩川をこして八重原に打出る敵
又打出て手白塚に陣取る忠世柴田を使として元忠
親吉が陣に遣しいそぎ一手に成て川をこし給へ
これ敵の後ろを出てたすみ打べし皆殺にせんと
いひせまり元忠これを制し昌幸は謀事をたくみし地
理よく知りたり味方をおびき出さん為にこそはかるらん
寄らんをやりすごしけるに忠世腹を立ちける
ハ左程敵をおそるゝしくハ見かしらはつきまる

とかくしていそがせられも捨置候昌幸も手白塚より
引て上田の城外に陣をとりて数日にらみ合て居
たりける大君此よし聞召て井伊直政松平康重（松井ノ周防守康親のあまし）
両人加勢に差そへさる北條よりも軍勢を出し
て沼田の城を攻らるしに昌幸の嫡子真田源三
郎信幸戦てよせ手の勢を打破る廿日昌幸柴田
康忠の陣におそひかゝりしを康忠戦ふて打やふり
敵破れて引処を岡部弥太郎長盛をち合せ人
ませもせずさんざんにかけ破る（今泉州岸和田五万三千石）其程に上
杉景勝大軍を起して真田に加勢せんと出べしけれ

八九月味方陣を引く井伊柴田志んかりしてけるを
真田幸村（源二郎）追うけんとのそむ昌幸徳川の勢大将ハ
ほこれも聞ふれしか陣をとゝのひけるう安からんそ制し
止む」小室の城信濃越后の出口にあるりて城主依田信
蕃先達て打死し（前ニ付す）嫡子源十郎康国いまた幼か
なれハ大久保忠世仰をうけ玉ふり後見して守る（依田の家
故ありて越前家ニ仕ふ）十月北条の使者来て誓をかさね侍る」先
達て関白脇坂安治不思議のえうしいて瀧川雄利か
城攻落し伊賀志广の両国侍へし（功いつきも前ニくはしく見ゆ）御
感悦のあまり摂津能勢一万石を玉ひ従五位下中務

少輔になさる一ヶ月をすきて和州高取二万石の地を
玉はる今月又淡路須本三万石の地に移さる去る年
の内に三度所之しして知行高三倍になる世間の人
羨しきるかに以ひ侍りし」岡崎の御城代石川伯
耆守数正ハ譜代功労の家柄なれハ大君の御覚へ大
かたならさりしか小牧合戦の時味方羽柴の勢に
勝ましとおもひて二タ心をいたききりし事大君に
申上し人ありしかと大君甚うとくも思召されして
いよいよ大切に御あしらひありし数正も豊臣家の日々
隆盛になるを見て携もちたるを直ハせ松平近正

をおのか方人にせんとて内々使をさしつかひ心中を注
けしかハ近正怒て使者を追かへし大君にをせま
ゐりてかくとや上さり十一月数正妻子引具し信濃
の小笠原貞慶しりそて一味ありけれハそれか人質ヽ盗と
出し国隣の城を去りて都にのかる関白かもとに不
忠不義をにくしみひてよくもそそなしたまひ或
人狂歌をその門に落書し人々面白きるとて
ゐもしろかれハ数正志をしいハ世間に面目しらく病氣
ないたしらんて門外に出さりしとそこのとき御旗
の人質にゐる恩澤城中にてめしてあつかりとを深溝の城

主松平家忠変を告げ早く国隣にまかせ注けて四門
をかためん酒井忠次も吉田より馳せ来り御城下以の御番
勤む十六日大君国崇にうつらせたまひ城の要害をもや
付玉ひ急に大久保忠世をまさる忠世を小室の城を
後入しけるにひろり真田ハ親き上杉ハひまを移りひ
貞慶か数正と一味しるによりおのつら城をあける
を甲信二ヶ国款のものとなりんとて案しわつらふ
処に舎弟平助忠教命をすて守らんといふ（これ大久保彦左衛門なり）
忠世よろこひ汝なくてハ款をとてきまじき（なきにきと）て
駿府へありぬその後大雪ふりけるき款も動くらまし

八年明けて忠教ハ代々の大将を待受て濱松にて
飯久しく関白既に南海道北陸道を打随へ九州征伐の
企ありと聞えし 大君と北条と東海東山二道にあつて
おのかおのか備へなしぬを懸ひ大納言信雄にやさ
ましやう徳川氏を武威さらんふして境内すれしひ
あはらぬ力業にて争ひかゝし せひに和睦をとめ又て上
洛をうたんと思ふハ以てに徳川さへ一味あらハ北條を
ひとつ者ハ降らさハ滅亡をまぬかれん御見込よきに
とりもちせられよとあられハ信雄羽柴下総守勝雅
これ瀧川雄利か改名 土方河内守雄久を使としてそのまゝやさせ

らる廿八日 大君国許にて使者に御對面ありこれ長
久手の合戦に於て秀吉の郎等多勢打亡ぬ秀吉
いかはかり恨を怨まる事なるらんされ何とて上洛を
さへきよしなし 信雄叫とやせられてるさる廿九
日大地震畿内東山東海北陸尤はなはたし地さけ水湧
家倒れ死人数をしられす毛利氏右より佐隆景治部か
輔元良を大将とはらせきて 関白礼をなし 九州征伐
北企の事内々や合兌らる 十二月三日小笠原貞慶越
後の勢をさそひて高遠の城をせむ城主保科正直防き
たゝかふて勝ことをはとらす 大君御書并御刀をたまふ 大君豊臣の勢

必ず来り座しとて合戦の御用意大かたならぬ信
玄ハ兵書を求めて武器なと作りかへなとし海存甲州
浪人を御側近く然(さるもの)の家の軍兵をも御召され
被召て武用ひあまねくする多し 或人の中に武田家故実
に矢の根をはめくさみ入れこれを射らせける敵の
身に矢の根をのこして以て治せんとしめんなりとや
傳へし 大君かかるを聞召て(も) それは不仁の仕
方なりとて矢の道にて勝をとらずしてなりとも敵ならばれは
とて その主のためにおそ命を出して軍ハ其
もあつて悪むへきものならぬ矢傷ハとかく癒ば

せらるよきなりとて早速御觸ありて當家一家中の
矢ハ根を抜かぬやうに座しと定められけり 又
ある時御家人等に向はせられ岡崎ハ先祖の
墓所なれども上方よりの入口なれバ当家第一
の場所(也) 誰かは此城守るへきと仰らる 本多佐渡守正
信うけたまはり心鉄石の如くにて大事にのぞみて ア
我城門にはなるさん者に仰付らるべしとや 大君
それハ本多重次しかとて頓て重次免して城代
を命ぜられし 大君兼て臣下の諫言をよく御聞
せられ申上る者をとくつとき大切になさる 何の時

の上意に唐の太宗いかなる善をほどこさせましとよく
諫言を用ひられしに依て天下を太平におさめられた
まふと仰せけれは松の御かたはらにありし本多重次の
如きぶこつ者時にすゝみ方外の言して御笑
只今事ならぬ事にて御氣色換せしことなかりき又
ある夜外様の侍なる人ふところより一封の書
を差出しけるにうつゝらおをきりて献るそれを
何ぞと仰られしに是ハ某日ころ心におもひたん
ぞんずるところをかき記しまゐらせ候よき御事に
りつハ献る所なりとやにはかに御こゝろよげにてぞ

ましにてよろしく〳〵と仰らる一條をよく〳〵御らん給ひしとに
ことことくよみはてゝ其ましを信らまして十余ヶ條をよく御
て後にこれまで諫め給ふ此度にかゝる事なくして
此後も思ふ所あらハ心におもふまゝを憚る所なく申せ
の程神妙の至と感し仰おかれしかは彼人
よろこひよろこひ〳〵をそして退出る本多正信御前に
ありしに唯今の中余いかなる事や奏しと仰あつけ
ましそ事なる些碎にして国家の大勢に係る
儀の用ひらせあるへき一条もなかりしと申
けるに御手をうちてせられしいやしからぬ智

をはかりして思ひめくらし所に其智のつゝかなき
いゝるせん彼か年比時を待て我を誅めん
と思ひしにこそ有難かりき　かゝる事まて
やうやうあけなは元ろへきゝる必す耳にいらん
事を仰られ　正信感服し御免ありて今夜の
事ともを子息上野介正純に語り聞せ給ひけれ
御心なりと涙をなかしける　正純その人ハ誰なる
らん又いかなる事をや申けんといふ　正純[信]氣色を
損し其申せし事も其人も汝か知て何の益かあ
らへきとそ云れしとそ
(越)　今月関白木村弥一右衛門尉を越后に遣ハされし景勝を始として宗徒の士
大将等に物を賜る事おひたゝしく　程なく上洛の
事をすゝめられけれとも難有御返事なし　今年
ハ諸国飢饉又疫癘流行し死人夥しくかゝる
草の根を掘て食とせり地震も毎日やまつして来
年にいたる
天正十四年正月十日　大君岡崎にうつらせ給ふ　十三日
信雄再ひ織田長益羽柴勝雅して御上洛の事を
すゝめらる　大君　関白のいさめを守らひて御許容なし
十九日吉良にて狩しゐ給ふ　廿一日長益勝雅土方雄久と

又御狩場ニ見来しけるに大君鷹を御臂ニ居へあひ
し折からなれハ御用意をやそのひぬ此上ハ一下佐ゟ
こにせんいらて秀吉はかれニ使ふへきと宣ひて大悦
たてさせ給ふ人々三人返々言葉もなく翌日又見参ニ
出けれ大君聞せ給ひ用もなき事ニかゝつら滞留ある
そいそき返せと仰せ給ふ勝雅をみて関白殿下
殿を以 大君を 待給ふるなし使者三度ニ及ひ
御返事下されけれ関白今度ハ攻下るへし其御
領内の様子を伺ひけれハ御要害も用心として
殿にハ精らし遊ハせ給ふ今もあまし関白

百万の軍兵まいらしそらニ攻下せ給ハいかにして防き
給ふよふし御勘考あそハしと申せ 大君御聲を
高くしヤア何と申そ家康ニおそしをかけんとな
秀吉こそ何ら来るとも十万の勢ニおもすきし
家康も四万の軍兵ハ何り案内をしうる味方要害
をしるそなからも勝軍必定こ汝をしもや長久手
にて秀吉か肝をはらしぬ再ひ来るならハいけて
返れましきそ此旨きはと秀吉ニいひきかせよと
てけと立て入給ふ使者返て此の趣ニ申上関白
の怒りをはらり兼恐まていまふしぬ関白返一

少なし家康ハ日本一の剛の者なりとて立腹の氣色
なし蒲生氏郷堀秀政は上ハ御軍勢をさし向られ
あるへしと勧めしと少も入すそれをやせんかくやせんと
案し煩らいをしけるか四五日ほとして夜半まきくるまる
俄に信雄と勝雅を召さき帯刀あらて寝間を
出られしや徳川を上洛させたりし事ハ二人柄き
まして言葉なし関白兼て一人の妹を佐治日向守
にまいらせられしかそれを取返し下人にそへる妹
を徳川の御臺所にそなへ婿とかなさハよもや上洛せ
ぬ事ハあるましそれにて尤はかりハ大廳（秀吉の母朝日の前の）
御出を願ぬんのこと仰らる御側に侍りし堀尾吉晴
生駒親正言葉をそろへ御妹君をいつかたにまいら
せ玉ふやと申せしに佐治日向か妻にせし妹ハ日向ハ
勘気ある者と天下のためなれハ申きけなハ命そそ
むくましきなれとも吉晴親正両人して日向に御
内意をさとさせ玉へハ日向も君父の仰せ弛道に
とてせんかたなしとて妻をさり自害せし二月関白
織田長益羽柴勝雅天野雄光冨田知信四人を使者
にそして申させけるに秀吉一人の妹佐治近去りて夫ト
死して孀となりぬるはなはにたのみ尊家に参ら

せらるゝは御側をも免しはなちまいらせんとて秀吉か身
に代て大慶にたへまさる所也と別に又浅野弾正少弼
に内命を申付けて初とよりさしむけらるゝ旨にて四人
の使者を参州吉田に遣り酒井忠次に就て申入らる
忠次也 大君の御前へ召して御きこしめ申せしに
よりて頓て御ゆるし有て廿二日吉良に於て四人の使
者に御對面ありて三ヶ条の約束定めし上にて縁
談をハ申へしと仰らるゝいはゆる御ヶ条にはやくも御ゆるし
抔申せしかいまた汝等か申へきむねなかるへしと
仰られしかハ浅野長政か内命を受て清洲まて来
下れ彼者に仰せらるへしとて人を馳て 大君御ヶ
条を認めさせて長政に渡さる 第一に豊臣の妹に男
子出生ありとも 世継きに立らるましき事 第二に長
丸を（台徳大君の御事なり）人質に参らする事 第三に家
康万一早世せは家人として長丸を輔佐し関白より
領内の沙汰無用たるへき事 長政拝見し関白
殿下よりも三ヶ條の約束を自筆にて認め差さ
出れとて懐より出して読上けたるに 大君の御望
とおもひしちかひ 大君御感悦ありて御縁談との
定せられ廿七日太納言信雄え使をつかはして和議を

のひし御礼を申させらる」関白 天子を迎へ奉り
饗応したてまつらんとて内裏の西に於て内野と
いふ処に館をたて金銀をちりばめ給ふ今月成就
しられて聚楽亭と名付てとゞまりせらる」三月
大君本多忠勝を結納の御使として都に上せ給ふ
関白大に悦ひ引出物あまた玉へる 十一日 大君伊豆
三島に於て北條氏直と御誓ひをかはさせ玉ひ
関白のさそふいふともかりうさき故し北条に於ては
隔意あるまじとて沼津の郭をそ除けさせ
廿一日御帰城なる ㊈ 島津の勢日ふし盛まして

大友か領内に打入る事度々に及ふ大友宗麟おと
ろへて政事には怠て被官の面々叛くもの多かりしかは
つひにそ豊後の国をも島津に合せられん事を
おそれし今月都に上り関白に給仕してそのよしを
頼ふ関白兼て九州征伐の事思召しけれはあるによりて
暫く本国に返て待つ可しとて祢んころにもてな
して返さる宗麟幾程なく身まかりぬ嫡子義統
世を続き愚将なれは国いよ〳〵おとろへぬ」四月
廿日御臺所京都より御入輿榊原康政御礼の使者
として都に上せらる兼て富田左近か家を康政の旅館に點

せしも夜に入て関白殿は彼家に成らせたまひ康政が手を
取て今日の對面はそれ汝かはからひなれむかし小牧陣中に
して康政御方の軍に檄し合せ大恩を忘れて主君
の子失はんとせる悪逆無道の秀吉に組せるものや
はあるといひしによりて怒りに堪かねして今の康政生き
なからふ事をせんもの哉と勅責ありしにまかせ申しと
天下に觸るとらく徳川殿を親しう成されしは康
政が如き家人ははやくあらんや秀吉がまつりごとは
なからふるとし明日の見参待遠に思へたまひて
来りたるはいかにと仰られし康政殿下に申されし時

の御事にてなし言葉にも述べられもせられし五月景勝
上洛有廿八日聚楽の御所に参る御ありてあり大方ならず
られ貫白執奏にて景勝従四位下参議に任し直
江藤田安田等を初として家来五人敍爵ありし
七月大君上洛の御評議ありて酒井忠次事ゆゑし
我もへられとや恐れをなし又思ひ留りぬ或人
関白殿し怒りをおこしよそし秀康殿（於義丸殿）
失はれなんとやし大君守ありしもし秀吉が
望みに依て我子あたへぬ彼今それ秀吉の子にはそ
はるも家康が子にはあれ秀吉の子殺さんに家康

何とかかりふへきと驚きあへる」十七日真田昌幸追討
のために駿府に御進発なる 宗 廿四日 皇太子誠仁
親王薨御 陽光院と申奉る 九 秋月筑前守種実ハ
年ごろ弓矢をとりて九州に名誉をほどこし上ハ本国
いふに及ばず豊前の侍種実が手に従ひける者多く
大友に叛きし近国北国人等も加はりしかども今月
島津義久舎弟兵庫頭義弘四男中務太輔家久を
筑前にさし向け国中大方島津に従ふときゝ種
実ひそかに島津に心通はして我家をたもたんやうは
なからんとて島津に使をたてゝうつくしく案内して筑

紫広門と戦ふ広門打まけて降参しぬ大友の城兵
多くハ攻おとされ筑後の立花の城主戸次道雪大友
を叛き龍造寺に従ひしが隆信死せるに及んで大名
の列に入り嫡子なきに依て筑前岩屋の城主紹運が子
宗茂を養子とし 高橋ハ三池し 年つもりて七十三歳高良
山の陣中にて死し左近将監宗茂家を継ぎしが今
度島津の勢岩屋の城に攻よせると聞て実父高橋
紹運をかのが城にむかひ迎て一ト所にたてこもらんとせし
かど紹運聞入ずて宗茂が方より軍勢をたすけて
加勢にさしつかはしけるを叶はずとして岩屋の城から紹

運ハ自害しぬ嶋津の方より紹運か子重勝正統増
をハ扱ハかりて生捕をぬ如くて高橋立花の両家か
斯て関白ニ方人の事申そひたりけれハ人を馳て
都ニ注進せし嶋津の勢をそんて宗茂か城ニ攻よせ
たり関白注進の趣をきゝ黒田孝高を藝州ニ
下されて秀吉近日大軍を起し九州ニ向ひ給ん
去程ニ島津か勢遠く筑前筑後ニ攻入るよし
聞及ひぬいそき軍勢を出されて味方の諸城ニうし
ろまれけるへしと申遣ハされ黒田孝高を軍奉行ニ
仰付らる毛利氏元春隆景ニ先陣うけさせらる

後陣ニ備へさせ豊前の国ニおし渡さる、八月真田昌
幸小笠原貞慶又降参しけれハ大君ゆるしおハして
甲州御巡見ありける関白思ひの使ニ自筆の書簡をも
たせ文言きこえて丁寧ニて大君ニ御上洛のことを
乞ひ当時の大小名秀吉か威ニ従くもの大かたハ故
織田殿の時ニ同輩なれハ心中何とかくおもひやらる
らそやくもあれハ下知ニ服く者なく御辺一度
御上洛あらんにそ御威光ニ依て秀吉か威を増し
天下の乱を安んせんと思ふし招もうらひぬれと人
質のためニ母上を参らせへきにてはとありける大

君思慮をきハめて御返答に及ふ所なしとて来使を
返しぬ㊈藝州の勢小倉の城を攻おとし島津の勢
宗茂を取巻く事数十日か間に宗茂もと若年
なから胆ふとき人にて防戦ちからをつくしけるか毛
利の後巻なりと聞て島津の勢肥後の八代に陣を
引く宗茂是をみて岩屋を取返す九月関白仙石
久秀を御使として島津か年来押領せし国々
をうけ渡しいそき上洛して殿下に伺候すへきよし
書簡を以て申入させ且又島津とても下知に叛
くともみえなは軍すへからし以の外あらゝかにて秀吉
か向はんをまちてと仰ふくめられし土佐の長曾部軍勢
を催してその所々に遣さき加藤嘉明脇坂安治も
随ひせられけりかくて仙石権兵衛久秀を四国の人々
引具して豊后の府に押よするか先島津か許に使
立て仰をつたへさせられしは義久書を以て地になけすて
て猪冠者ぬしいかてかゝる無礼をいふそ抑当家は
曩祖豊后前司忠久鎌倉将軍の御旨を蒙りて
薩摩の国の守護職を玉はりしより代々十四
代四百余年の星霜をふるまて近衛関白の外
勅命を傳ふる人もなしとて使者をとゝめけり

けれハ久秀大ニ怒り大友の勢四国の勢一ツニ成て島
津家久と戦ひ難しニ叶かさりし長曽部か嫡子宮
内少輔信親并十河民部大輔存保討死し元親ハ伊
豫ニ逃け久秀ハ豊前ニ逃さりき嘉明安明二人ハちれ
とも退さて戦ひしかハ島津の勢も進みかねたり
関白此よしきこえ安からぬ事ニ思し先陣の軍みたりに
軍せしかハとておほせいひけれとそれニ四国の奴原か
そこらなる軍して合の合戦ニ叶まけぬるゝの
不覚さよ信親討死せし上ハ元親か罪ハ去ぬ
くゆるしぬ仙石めか所帯没収せよとて讃岐国をハ

奪ふて尾藤甚左衛門知定ニ給ゐる知定兼て数度の
軍功をかさねて関白その勇気ニめてゝおもひしニ
たり餓ニ大国を給りけるとそ廿六日関白水野長政富田
知信津田信季を濱松ニつかハされ大廰を人質ニ宗
らせれニ相違なき所之上洛をいそかせまへといハせけ
て信雄ニ又長盛勝雅雄久三人をつかハしてかけ
きやさまけれハ大君やうやく許容ありけり
関白大ニ悦て悦ひ大かたならされハ参議秀長母上
を人質ニ出さは後の世までの瑕瑾なるへしと諫
やさまれとも汝らことき愚才の知る所ならす

さとて関白をころさせ給ひけり十月　大君中納言に
移り給ふ去も関白の執奏によりてきこえし参議秀
長も中納言に移り侍従秀次参議にうつさる　大君
上洛の御ついでに御領内の人々関白よりの人質
ハ必ず似せもの成敗しとうけたまはらぬ御臺所ハ
又こなたとの母上ハとても来り給ふましと思ひ
も御家人の面々ともに孝なる者多し　大君の仰に
御ことの人質なるらんとて　おもひ定められさましと
関白も天の授くる処なりしを　ちひてはかりことにハ天命を
知らぬ道理なりその上かさね家康のことに於ては

何しらひ尤らしくされ和議をなし縁談をなし偽り
ならられし母を人質に出せし世上の風聞をいとはれ家康
か弓矢の面目ハもや立たり於ても二の足引くハ天下に
卑怯を志められあり〳〵ゐとも加まらに欺かるゝ事あらそ
悔む処なれハ今や天下静かならんとするのところ東
西又軍起て人民ほとんく亡び失なんハ不便のことなり
行まじハ罪なふして斗死せん者どものために家康
一人かかゝるなりハかんぶらうゆしき事なれやと宣ひ
十三日御門出ありて岡崎に入給ふ御同勢一万二千人なり
大久保忠世石川家成若君秀忠公をたすけ来らせ御

留主居を蒙り井伊直政本多重次と岡崎の城御留
主を蒙る 又直政をはじめて都にて変ありしハこれハ
東寺に楯篭らんとし汝ら二万の軍勢にて近道々
馳上る座し前後より戦ハ氣をふるふあらまし
大小名の内にも為に往く者かるべし その期に
至てうら切せぬ事やあると宣ふ此時織田ありし
志らしく丹羽蒲生堀の面々をはじめ内々使を
以てあるへきを通ハせる人ありしによりかくハ仰らる
し之 廿日大廳岡崎に着きあり御臺所出させて
致らせ給ひまことの母上まて御したしくなりしハ

御家中をはじめ御國人やからつきぬ直政重次御
志を蒙りて警固を直政を大切にかしつきせし
に重次下部に下知して大廳のおそばまハりを
日よし薪を積えて山の如しおきし 大君の御身に
万一変あらバ焼殺しやさん料の薪とかや御様
嫌を伺ひに出るし 顔色声音何かしけれしハ御
供せし女房たちこゝろおそれてむかし 三河守殿
萩九殿秀康卿 始て御見へありし時仙千代といふ 旧名の 重次ヵ子
御伽の為にまゐらせし 御供しあそそを 関白様御談してあまりハ鬼
作左ヵ子そと仰ありしかバおそろしく鬼も子

をうむにやとてものかしに人々みなさりしに其
親の鬼をハはけらもし事のあはれしやとて泣き
くときゝて大廳に申せしに大廳も大に驚きかなしけさ
まひぬ廿一日大君岡崎御門出有り関白の下知とし
て道作らせ橋かけさせ御旅館の儲驛々山の如し
廿七日京都御着し茶屋晴延か前に居家に入まし関白
秀長并浅野長政と供人わつか四五人つれ夜すこ
かりに茶屋か家に至りたまひ大君の御寝所に通ら
せ一礼有て長篠合戦にめてゝ御目にかゝられし
事一年にあひぬ乱もうち世の万民のなやみと哉

ひてたりし上洛あり秀吉か天下の大業を成就
させたまふ御恩の不と何もしの世にかなるへきとそ
用意のさうらへ出させ一品々毒味して盃をまゐ
饗に入て飯ありふけれより毎夜志の日来りあひ
引出物おひあとしある夜関白かしにかの咄に沽け
秀吉大うと天下の乱をおひらけぬれと諸国の大名
たて秀吉か武威におそれて随ふのみ心服せさる
者あるをいかにせんと宣ふ大君の御答へにせんかた
る所信義を失ひあふ天下の信義の大将に心服
せぬ者をたまへけと此もしハ関白御作をはて是んき

取りぬ物昨朝表向御足業の礼式をおこなはんと
存せたし一日ヶ程秀吉に免んして首をさけ諸大名
の手本を出しなさるゝ如しとくわしく御たのしみて
十二月二日表向聚楽の御所に御年ヶ行り関白一族を
そしめ宗徒の大名をはつめん威儀ましくしたる者
揃ふて在京の諸大名次第に依て列坐せて大君いまし
うやしくしく御拝礼行りしかハ諸大名大に行きもひ
そらに袖を引合て関白殿下の御威勢のおそろしさ
よ母を人質に入れて来し徳川家さへあの如くかし
こまりまして申しうやまひ奉らせる へつらひと

中ゆへ翌日関白大君を饗応しまし四日秀長の
館にて饗応あり酒宴のなかばに関白俄に入らせら
れ赤き頭巾かけられ紙衣の道服着てこしらへ茶を
立て大君に参らせて申されけるは秀吉も今日
御餞別の御酒参らせらるゝとて挌しくに出ますも
ときし浮田直家以下の大名次第に依て御前に並
居られ関白声をかけられ大聴の飯沿を待遠に
おりおもふらん徳川中納言に飯國をいそがせ申し
とやさる秀長大君の御足にさそうて心をさと
せしかハ大君きゝみて殿下の御紙衣まゐらんと

宣ふ関白こさと会釈してけるとく陣中までの道服まて
平生召され物なりしと作る大君いや家康かくてあるからは
殿下に陣羽織はきせ申ましと宣ふ関白ありつことして
ぬきはなし気色よき婿えて安心しけりと申させ也
いかり合ふへくし三國一ときそやしけるかほとより
関白の威勢をおそれぬ者なかりしき関白石川数正
か事をかけきや申されし大君に又気させける関白又
大君の御館を二條につくらしめ秀長に手使させ申はく
御上洛の時しの御雑費の料として近江の内三万石を
気つかせられけるに酒井忠次にも屋敷一ヶ所米千石下さ

る秀長家人藤堂仁右衛門高虎を二條の普請奉行と
それにより高虎御家の出入となる今伊勢津三十二万石余五日大君
正三位にのぼらせられ井伊直政を兵部大輔本多忠勝
を中勢大輔榊原康政を式部大輔本多廣孝を豊
後守大久保忠隣を治部大輔永井直勝を右近大夫
になされしいつれも従五位下に叙しそのほか任官お
ほく御家人の任官あるはこの時よりはじまりぬ関白鳥
居元忠を召して叙爵させんと宣ふ元忠関白の
下心に他家の家人に恩をうけて味方に付んとせ
る謀事なりと知てかたく関白に向ひ某は元々

無骨の田舎人身も又片輪に成りたりしゆへ 殿下に出仕
もなりがたからん事を以て御免を蒙り居しと辞
しけるその後又元忠が嫡子新太郎忠政をもつて羽
柴下総守勝雅が娘に配し之を養子となして仕
へさせしと申しけるは愚息を以て下総守殿が娘に配せ
らるゝんにも其作に随ひ申遣し在仕るへきの条を
御免を蒙られけるし元忠が先祖以来徳川譜代相
傳の家従にしてを子孫に至て他家に奉公仕るへき
者にはあらんと申す秀吉鳥居が申所そのいはれ有りとて
勝雅が娘を以て新太郎が妻となさしむ 七日 天皇

御内禅 皇太孫周仁親王御践祚 陽光院の王子 後陽成天
皇と申奉る 十四日 大君御皈城ありて頓て大廳をも退
し案内せらる此度も井伊直政して送らせらる直政
並て承んだるにかしこまりまするに女房達ハえより
大廳の悦ひ大方ならなれ関白にもさまして饗応の儀あり
石川数正も昔の傍輩なるゆへとて接伴に出させしは直
政数正におそむき居て面をそむけさせかへりに向ひたり
ゆへさらぬ数正ハ譜代相傳の主君に叛き案内せ
殿下に随ひ大悖病の男なれハ直政かまへと肩をな
らへ勝をとりなせんより御免を蒙るへきよりてれとや申し

けれハ御前にありける人〻皆舌をふるひけり大廳
御供の女房達関白の御前にて鬼本多とかいふ者か
やりしにあらふてわひ申せし早く徳川殿へ行くれ
いかなる罪をもゆるせて大廳の御伴しをもさせ給へ
とやかくに訴られを関白打ゑみ給ひて家康
ハよき者をも何ゆゑ召仕ひけり秀吉も其よき家人
をハほしき事にありけるとのたまひ給ひけり廿五
日　主上御即位の礼を行ひ給ひけり ⑨ 先
達より薩摩の島津義久豊后の大友打従へんとて
三方より乱れ入り降参城十六ヶ處に及ぶ大友義

統出合せさんとしけるに成てうしく今月義久すゝみ踏込て
さしかゝりしを攻寄り伊集院美作野村備中白濱周防
三人の大将として豊后鶴崎の城を攻させける城主
図書部ハ先達て高城の合戦に打死しその妻林氏の女
操を守りてみたりに城をすてて居らけるか敵攻よ
せるを聞て堀をさらへ石垣ほくろひ落し穴るいし
自鎧なけられ長刀かひこみ城中をよりまはり
敵の入らんとするを四方に手分してよせ付ぬ頃
て兵粮つきけれハはさしと降参し三将を城中に
むかへ入れてもてなし美目よき女に酌を

らせなとして三将をとりこにすへし薩州に与せんと約束し
伏勢を置て三将を生捕り首切て捨ける大友の幕下
多き中に城をまもりて敵を破り大将三人まて生捕しハ
たゝこの婦人壱人なりき黒田孝高豊州の勢を豊
后馬か岳閏津二ヶ所攻落しぬ此間に吉川治部大
輔元春と申せしハ双なき武勇の大将にて先に
秀吉高松の城攻に毛利氏和議をとりあつかはしめ
元春一人同意せす秀吉関白となりしかハ如何下
知に従ふましとて隠居して嫡子元長に家をつ
かせその身ハ浮世の外をたのしみける関白此度黒

田孝高を豊州にはなされし序に治部ハ隠居の身
なりといへとも九州征伐ハ大事の軍なれハ出陣ある
へしといはせける元春病気といひこしらへてことわりける
を毛利氏何なうちに来て関白の仰に背かハ我
一家の災ともなりなんと申させられけるによりて元春
やむ事を得すして九州に向ひしか心中と
く安からん脊に癰といふもの出来て小倉に留り
今月身まかりぬ兄弟の子に遺言しけるは我死
骸ハ打捨て島津打従へよとはかられハ元長兄弟
の廣家を棺にはけて本国にかへし葬礼をなして

直様寄へきよし思ひやりぬるにて藝州の勢ハ筑前
に打入て障子か岳を攻落しけれハ敵ともハ香春の城ニ
逃入る追付て攻し所ニ元長も弟廣家の来るを待
うけ一ツニ成て香春の城攻おとし城主高橋種元
降人ニ成て出つ　十二月朔日関白太政大臣ニ移り関
白の職ハ元の如し　大納言信雄従二位ニ移る　大君御
城下を移し玉ハんとて兼て駿河の内を見立玉ひ
あひ上田合戦の後より普請をしまうり今月成就し
て移り玉ひ　土岐定政を濱松の御城代になされ多
くの御家人の中を撰ミあひて板倉伊賀守勝重を

駿河國府の町奉行職に任せらる勝重の父四郎右
衛門好重ニ男子三人有り嫡子杢右衛門成重永禄年中
中島合戦に討死を勝重を二男にて參州夏山の禅
院に幼より僧と成てありけるに三男喜藏定重天正二月
高天神の城にて討死を　大君の仰にて勝重還俗し
初めハ板倉四郎右衛門と名乗る此人知慮ふかく
書籍にもこゝろ　奉行職蒙てより　親しき人の以
ひける訴訟者ありけるとき誰かの送り物とても受れ
おふやけのさたきゝして御境内不知ぬ者ハなかり
けりし　関白大坂ニ至りあひ奏聞をへて上らる

薩摩征伐なれバとて軍勢催促せらる畿内をはじめ
南海北陸山陰山陽東海東山三十七国の軍勢都合二十
四万人明年二月までに大坂へ集るべしと觸らるゝ三十万
人一年中の兵糧をこしらえ馬の飼料も是に准ず小
西隆作建部寿徳宮木豊盛三人運送の役を掌る豊
前小倉へ渡して廻し石田治部少輔大谷刑部少輔長
束大蔵少輔兵糧奉行を掌るに今月島津義久豊
后府内へ攻入る大友の治所大友義統叶はずして豊前へ
落行しかば義久府内の城へ入て軍勢を屯し
隣国へ手入りせぬに毛利氏肥前へ使者を立て龍造寺

に降参の事をすゝめられ政家悦んで一味を藝州の勢
諸方へ陣取て関白の御下向を待るゝに今年関白
東山に方広寺を建らる土像の大仏半身の高さ十六
丈大木大石を集め二十ヶ国に公役かけて費用の金
銀おびたゞし五年かゝりて成就す

国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan